柏原市内遺跡群発掘調査概報

平成１９（２００７）年度

平成２０（２００８）年12月

柏原市教育委員会

はしがき

昨年度、市域に所在する埋蔵文化財につきましては、遺跡の広がりや遺存状況を確認するための発掘調査を２ヶ所で行いました。その一つは河内国分寺跡であり、他の一つは智識寺（太平寺廃寺）東塔跡です。

国分寺跡は、奈良時代に聖武天皇の命令によって全国の国ごとに建立された古代寺院の遺跡ですが、現在、茨城・静岡・香川の３県で特別史跡に指定された国分寺跡が存在し、29の都府県で史跡に指定された国分寺跡が存在しています。しかし、古代遺跡の宝庫である大阪府では、河内・摂津・和泉という３つの国があったにもかかわらず、史跡指定された国分寺は一つも存在しません。摂津・和泉の国分寺につきましては、その所在すら明確ではありませんが、河内国分寺は柏原市東条の地に立派な塔跡が残っています。さらに確認調査を進め、その中心である金堂をはじめとして伽藍全体の様相を明らかにするとともに、その保全について行政的な対策を講じていくことが必要になります。

また、智識寺跡につきましては、現在大阪府の史跡に指定されて保存が図られています。今回の調査によって東塔の規模や構造はある程度わかるようになりましたが、東塔以外の伽藍の様相は未だにはっきりしておりません。今後とも貴重な古代寺院の遺跡が子々孫々に伝えられるよう、保存に努めてまいりたいと思います。

しかし、埋蔵文化財行政においては、こうした行政サイドで企画した確認調査以外にも、日常的な業務である住宅建設や土木工事等に対する発掘調査も含めた種々の対応が、より重要かつ優先されるべき事項と考えます。今後とも市民一人一人の御理解と御協力を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

平成20年12月１日

柏原市教育委員会

例　　言

1、本書は、柏原市教育委員会が平成19年度に計画・実施した柏原市内に所在する遺跡の発掘調査概要報告書である。

2、調査は、柏原市教育委員会社会教育課文化財係主幹北野　重・主査桑野一幸・同石田成年・係員島内洋二（嘱託）を担当者として実施し、本書には平成19年４月１日から平成20年３月31日の間に着手した発掘調査の概要を掲載した。

3、この他、本書には平成19年度（平成19年４月１日から平成20年３月31日）に実施した発掘調査の一覧を掲載した。

4、平成19年度において文化財保護法93条第１項・第94条第１項および第99条第１項にもとづく届出・通知がなされたものは220件、その中で発掘調査の指示は11件、立会調査の指示は20件、慎重工事の指示は189件であった。また、遺跡外の確認調査は９件であった。

5、調査・整理の参加者は次のとおりである。（順不同、敬称略）

分才隆司　　阪口文子　　横原美智子　　乃一敏江　　橋口紀子

6、本書において使用した方位は、基本的には座標北であるが、第７章の河内国分寺跡の報告では磁北を示している。また、標高の記述・記載があるものについてはT.P.（東京湾標準潮位）＋値である。

7、河内国分寺跡の範囲確認調査では、土地所有者、東条町第１・２区長をはじめとして地元の多くの方々にお世話になりました。記して謝意を申し上げます。

8、遺構・遺物の写真は担当者が撮影した。

9、本書の執筆・編集は桑野が担当した。

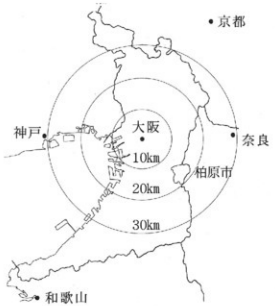
目　　次

はしがき
例言
目次
平成19（2007）年度　柏原市内遺跡群発掘調査一覧
第１章　船橋遺跡----1
　　船橋遺跡　2007-1次調査----2
第２章　太平寺廃寺----4
　　太平寺廃寺　2007-1次調査----5
第３章　安堂遺跡、安堂廃寺----20
　　安堂遺跡　2007-1次調査----21
　　安堂廃寺　2007-1次調査----35
第４章　高井田遺跡----36
　　高井田遺跡　2007-1次調査----37
第５章　玉手山東横穴群----38
　　玉手山東横穴群　2007-1次調査----39
第６章　田辺遺跡----41
　　田辺遺跡　2007-1次調査----42
第７章　河内国分寺跡----43
　　河内国分寺跡　2007-1次調査----44

写真図版
報告書抄録

平成19(2007)年度　柏原市内遺跡群発掘調査一覧

遺跡名　調査次数 対象地（柏原市…）	調査面積 ㎡ 対象面積 ㎡	申請者 用途	調査日 (自・至)	文書番号 担当者	備　考
河内国分寺跡　2007-1	39.11	柏原市教育委員会	H19.10.1	181-8	
国分東条町3898/他19筆	2,264.00	範囲確認	H20.5.8	桑野	
田辺遺跡　2007-1	2.00	個人	H19.5.22	191-2	
田辺1-1023	195.75	個人住宅		桑野・島内	
太平寺廃寺　2007-1	7.00	個人	H19.6.25	191-5	
太平寺2-179-2	215.42	府史跡範囲確認	H19.7.10	桑野・島内	
玉手山東横穴群　2007-1	84.50	イケソー開発㈱	H19.7.23	171-28	
旭ヶ丘2-376-1/他	38,708.82	宅地造成	H19.9.18	桑野・島内	
船橋遺跡	723.00	㈶大阪府文化財センター	H19.8.1		㈶大阪府文化財センターによる調査
大正2地内		大和川改修事業	H19.11.30		
船橋遺跡　2007-1	42.90	大和川河川事務所	H19.10.24	191-9	
古町地先	5,505.00	魚道設置工事	H19.11.13	桑野	
高井田遺跡　2007-1	2.58	柏原市	H19.11.15	191-8	
高井田地内	200.00	歩道設置工事	H19.11.16	桑野	
安堂廃寺　2007-1	1.00	個人	H19.12.6	191-10	
安堂町674	61.07	倉庫		桑野	
安堂遺跡　2007-1	164.0	㈱ビーバーハウス	H20.1.17	191-11	
安堂町899/他5筆	1,774.14	宅地造成	H20.2.19	桑野	



① 船橋遺跡
② 太平寺廃寺
③ 安堂遺跡、安堂廃寺
④ 高井田遺跡
⑤ 玉手山東横穴群
⑥ 田辺遺跡
⑦ 河内国分寺跡

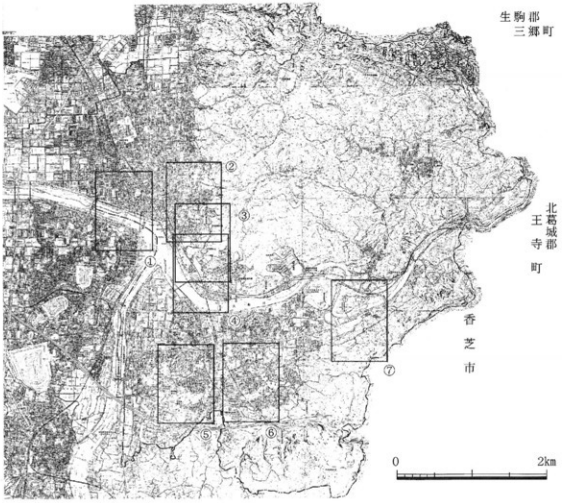


図1 柏原市位置図

第１章　船橋遺跡

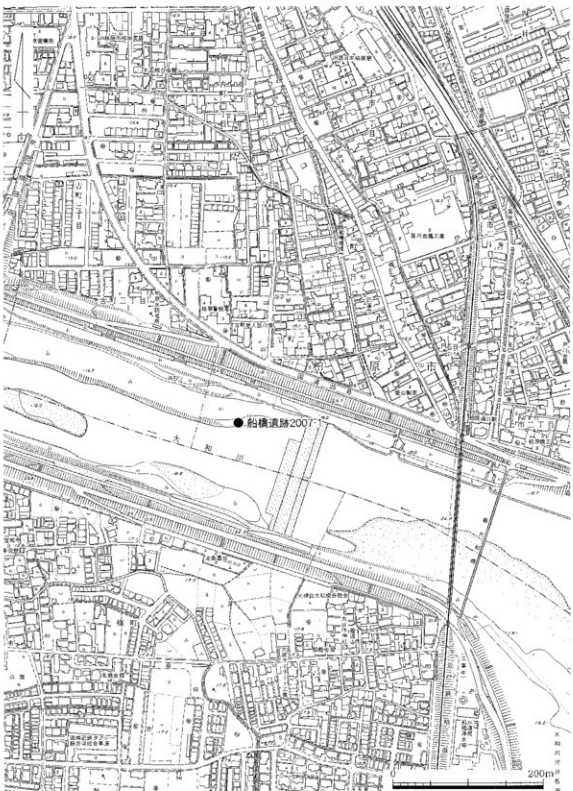


図２　調査地位置図（図１の①）

船橋遺跡　2007-1次調査

・調査対象地　古町地先

・調査期間　2007年10月24日～11月13日

・調査面積　42.90㎡

・調査担当者　桑野一幸

船橋遺跡は、江戸時代の宝永元年（1704）に行われた大和川付け替え工事で河床となり、水流によって多量の遺物が露呈されたことで明らかになった縄文時代以来の複合遺跡である。遺跡の性格は集落・寺院・官衙・墓地など時代によって異なるが、縄文時代晩期の船橋式土器、弥生時代中期の簾状文土器や後期の竜が描かれた土器、古墳時代初頭～前半の庄内式土器や古式土師器、飛鳥～奈良時代の瓦類、奈良時代の墨書土器や銭貨など、多量かつ多様な遺物群はいずれも地域・時代を代表する貴重な資料として評価されている。

今回の調査地は、大和川右（北）岸の河床部で1993-1次調査地と柏原堰堤の間の川岸にあたり、魚道設置工事に先立って実施したものである（図3）。この場所については、1993-1次調査地が北側を旧流路、南側を現流路によって削られた中州状の土地と見做されたように、右岸堤防に沿って西に流れていた旧流路によって遺物包含層や遺構面の多くが流失している可能性が高いとも判断された。

調査では8箇所の調査区を設定し、掘削・精査した。ここでは、東より順に1・6・7・3・8区の土層の堆積状況を示す（図4）。

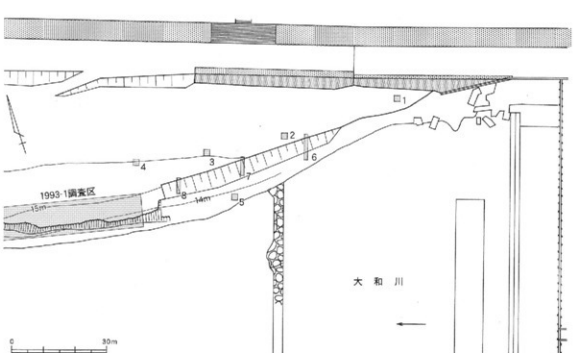


図3　調査区位置図

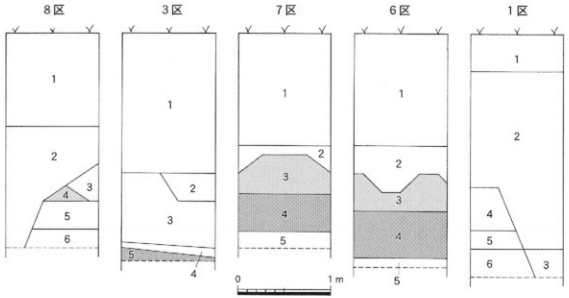


図4　各調査区と土層概略図

〔1区〕 1：砂、2：石、3：花崗岩角材、4：緑黒細砂、5：オリーブ黒細砂、6：オリーブ黒粘土質シルト

〔6区〕 1：盛土、2：砂礫、3：黄褐色～緑灰色シルト／遺物、4：緑灰色シルト、5：砂

〔7区〕 1：盛土、2：砂礫、3：黄褐色シルト、4：緑灰色シルト、5：砂礫

〔3区〕 1：盛土、2：石、3：砂と粘土の互層、4：砂／遺物、5：緑灰色シルト／遺物

〔8区〕 1：盛土、2：砂礫、3：細砂、4黄褐色シルト、5：中砂、6：粗砂

このように、6・7・3・（あるいは8）区において土師器・須恵器の小片を僅かに包含する緑灰色シルト層がかろうじて遺存することが判明した。

この結果に基づいて遺物包含層を遺すことが可能か否か調査依頼者と協議したところ、「工事の影響が包含層にまで及ばないように魚道の位置を変更する」との回答を得たため、これ以上の発掘調査は行わず、工事着手を認めることにした。

第２章　太平寺廃寺

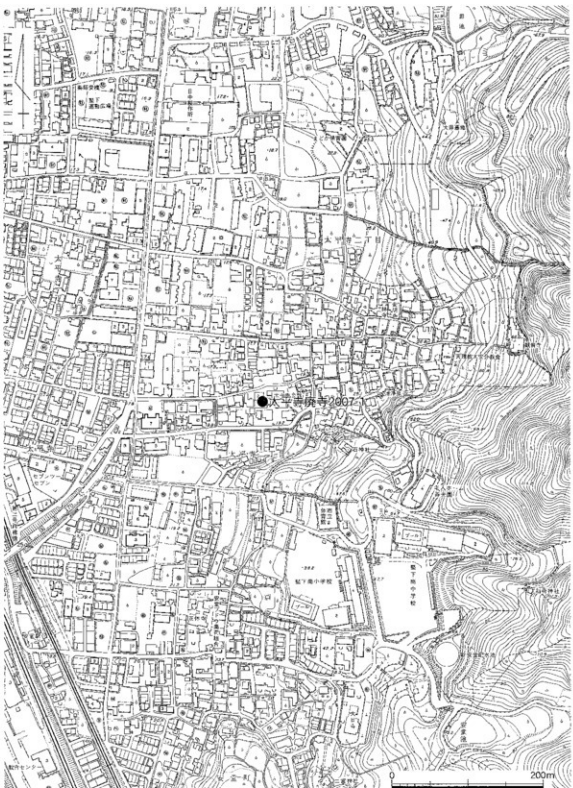


図５　調査地位置図（図１の②）

太平寺廃寺　2007-1次調査

・調査対象地　太平寺2-179-2
・調査期間　2007年6月25日～7月10日
・調査面積　7.00㎡
・調査担当者　桑野一幸、島内洋二

はじめに

太平寺廃寺は、奈良時代に聖武・孝謙天皇が巡拝した河内六寺中の一寺として、あるいは東大寺大仏造像の契機となった仏像を奉安した寺院として知られる智識寺に比定されている。現在、地上にはまったくその痕跡を留めていないが、江戸時代の村絵図や昭和55年の大阪府教育委員会による発掘調査によって東塔基壇の位置と存在が確定され、双塔式伽藍配置の寺院として復元されるとともに、その一部は「智識寺金堂跡及び東塔跡」として大阪府史跡に指定されている。また調査地から南東に80m程離れた石神社の境内には、明治の初年にこの東塔跡から掘り出されたという心柱礎石があり、これは大阪府有形文化財に指定されている。

なお大阪府教育委員会の調査では、鎌倉～室町時代に東塔倒壊後の基壇を利用して何らかの建物が建てられていたと報告されている。中世に存在した太平寺に関係する遺構とも思われるが、その規模や性格などは不明である。

今回の調査は、府史跡地において既存建物の撤去・建替えが計画されたため、大阪府教育委員会の指導の下に遺構（東塔基壇）の遺存状況を確認するために実施した。なお調査地は大阪府教育委員会調査地の南側隣接地である。

調査区の設定（図6）

調査では基壇面の深度の把握を主眼にし、調査区の位置・面積・深度等の設定についても、想定される東塔基壇を損なわないよう可能な限り最小範囲に留めることにした。

調査地は平面形が逆L字形の形状で、東辺の北端で市道に接しているが、その大半は市道から南に奥まった位置にあり、南辺の隣地境界線は幅40cm程の水路内に当たっている。

1区は調査地の南西側に設定した東西方向に長い調査区で、長さ 3.9m×幅 1.0mの大きさである。調査区の北西角の位置は北辺の隣地境界線から南へ約 3.0m、西辺北半の隣地境界線から東へ約1.65mの距離にあり、同じく北東角の位置は北辺の隣地境界線から南へ約 3.1mの距離にある。ここは、大阪府教育委員会による調査成果に照らし合わせると、東塔基壇の西辺や雨落ち溝の存在が想定される場所に当たる。

2区は調査地の南側に設定した南北方向に長い調査区で、長さ 3.0m×幅 1.0mの規模である。調査区北西角の位置は北辺の隣地境界線から南へ約 4.1m、東辺の隣地境界線から西へ約 6.7mの距離にあり、同じく南西角の位置は東辺の隣地境界線から西へ約 6.65mの距離にある。ここは、東塔南側の基壇面に当たる場所と考えられた。

なお調査地の標高は約18.7m、調査地北側の市道の標高は約18.2mであり、調査地は市道よりも50cm程高くなっている。

1区の調査（図7）

1区では、まず調査区東端において地表から45cmの深さで近・現代の建物に伴うセメント製の基礎が検出された。1・3～5層には建築廃材が多く含まれており、1～7層はこの建物を破却した後の整地層と思われる。なお、調査区の西側では北辺断面にかかるように花崗岩塊が検出された。その一部には岩塊を打ち割るための「矢」の痕跡も残っており、あるいは東塔の礎石の可能性もあるが、柱座等の加工痕は確認できなかった。

この建物の基礎は、断面図に示されるように10・11・14層をベース面として据えられていた。11層はセメント基礎の下部から西側に広がっている大きな落ち込みの埋土であるが、その中には12層とした大きな鉄錆塊（一部に木片が付着）が残置されていることから、この落ち込みは基礎を据え付ける際に障害となった鉄錆塊の一部（あるいはその他のものかもしれないが）を除去するために掘削されたものと考えられる。また基礎の周辺には9層（浅い溝の埋土）や8゛層のように巻貝の残骸や粉末状になって石灰化した貝を見ることができる。おそらくこの場所にあった建物では貝ボタンが製造されたいのだろう。

近・現代建物のベース面となった14層には僅かに土器や瓦が含まれるが、その下部には多くの焼土や炭化物粒を含む15層と、瓦（古代～中世）・壁土・凝灰岩を多量に含む16層が広がっている。これら15・16層については、調査区の東側で11層とした黄褐色粘土を埋土とする落ち込みによって切られているため、その広がりははっきりしないが、おそらく調査区周辺の広い範囲にわたって堆積している土層と思われる。なお、16層相当の深度において湧水が著しくなり瓦等の平面的検出状況の把握が困難になったため、17層以下の瓦の堆積状況の観察も兼ねて、排水・貯水両用の目的をもった側溝を調査区西端に設定した。

図6　調査区位置図

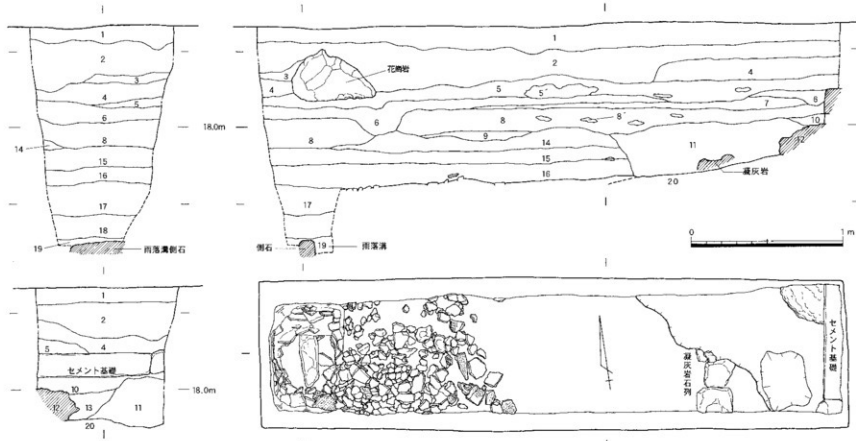


図7　1区　土層断面図　17・20層上面平面図

1. 表土　廃材多い
2. 黄褐(2.5Y5/4)中砂　礫多い
3. オリーブ黒(5Y2/2)礫砂　粘性があり廃材多い
4. 灰～黄褐(5Y4/1～2.5Y5/6)中砂　廃材多い
5. 黒褐(10YR3/1)礫砂　廃材多い
5′ 灰白(N7/0)貝殻が粉砕して石灰状になった層
6. 黒褐(2.5Y3/1)層砂
7. にぶい黄褐(2.5Y6/4)礫砂　上部に礫多い
8. 灰黄褐(10YR4/2)中砂　明黄褐(10YR7/8)の粘土ブロックあり
8′ 灰白(N7/0)貝殻が粉砕して石灰状になった層
9. 黒褐(2.5Y3/1)中砂　貝殻残滓(貝層の残り)混在
10. 灰(5Y4/1)亀砂
11. 黄褐(10YR5/6)粘土　礫多い
12. 褐(7.5YR4/6)鉄錆塊　一部に木片付着
13. オリーブ黄(5Y6/4)中砂　11層をブロック状に混在
14. オリーブ黒(5Y3/2)中砂　粘性があり礫多い
15. 暗灰黄(2.5Y4/2)中～粗砂　粘性があり礫多い　瓦片や多くの焼土を混在
16. 15層と同じ　但し15層より先瓦片大きく焼土少ない
17. 灰(7.5Y4/1)中砂　粘土ブロックを混在　瓦片や凝灰岩片を多量に含む
18. 炭灰(2.5Y4/1)中砂　層礫多い　瓦片を多量に含む
19. オリーブ灰(5GY6/1)亀砂　硬く締る　瓦片多い
20. 青灰～黄褐(10BG6/1～10YR5/8)砂質粘土　基壇構成土

16層よりも下部では、調査区東側においては20層とした青灰～黄褐色を呈する砂質の粘土層が検出された。この粘土層については東塔基壇の構成土と判断しており、遺構保護のため断ち割り等による断面観察などは実施していない。特筆すべきは、この粘土層上面において南北方向に連なる凝灰岩の石列が検出されたことである。石列は少なくとも３石が見られる。北側の１石は残念ながら先述来の落ち込みによって削り取られ僅かに残るだけである。中央の１石は平面形がほぼ方形で、平面的には南・北の石と面が揃っていないように見えるが、これは石材の西辺・東辺が欠損しているためである。南側の１石は直方体を呈するものと思われ、上面には方形の刳り込みが見られる。石材の上面は水平ではなく西側にやや傾いているが、最も高い部分で標高 17.82mを計測する。なお16層あるいは17層から出土する凝灰岩の小片は、おそらくこうした石列を構成する石材から欠損・遊離したものと考えられる。

この凝灰岩列の西側には古代～中世の瓦を多量に含む17～19層が堆積していた。これらの土層については、調査区西端に設定した側溝における断面観察を行っただけで各土層の広がりは把握していないが、その側溝最下部において厚さ10cm程の扁平な立石が検出され、大阪府教育委員会の調査の際に検出された東塔基壇西辺の雨落ち溝の延長上にある外側の側石と判断された。すなわち立石の東側が雨落ち溝の内部に相当することになる。なお立石上面の標高は 17.27mを計測する。また大阪府教育委員会の調査では、雨落ち溝の底には玉砂利が敷き詰められ、その外側は20～50センチの石材が敷き詰められていると報告されているが、今回の調査では掘削範囲があまりにも狭小なためこれらの施設を確認することはできなかった。

２区の調査（図８）

２区においては近代以前の土層の堆積が１区とは異なる様相を示している。まず１区で近・現代の建物破却後の整地層とした土層は、２区では１～４層などの上部層に見ることができる。また同建物のベース面となった土層は、２区では標高の比較から判断して６層あるいは８層が相当するものと思われる。一方で、１区では同建物の下層に炭化物粒・焼土・瓦（中世以前）を含む土層が堆積していたが、２区ではこれに相当する土層は見られず、東塔基壇を構成する13層とした粘土層が検出された。

13層の上面では東西方向に延びる浅い溝状の落ち込みがあり、その南西の一角から花崗岩塊が検出された。この花崗岩については、上面は打ち欠いた面であり、その北辺には幅10cm程度の「矢」の痕跡が見られることから、その上半部は相当程度欠失しているものと思われる。また平面的な大きさは、西半部が調査区外にかかっているためはっきりしないが南北72cm×東西46cm以上を計測する。この花崗岩は、その出土位置から見ておそらく東塔南辺側柱のうち中央間西脇柱を支えた礎石であろう。したがって13層上の落ち込みは礎石の打ち欠き・抜き取りを目的とした掘り込みと判断できるが、その形状が溝状を呈していることは、単に礎石だけではなく地覆や長押として据えられた石材も併せて抜き取ったのかもしれない。

なお基壇の構成土である13層と礎石上面の標高を記すと、前者は17.9m、後者は17.7mとなる。

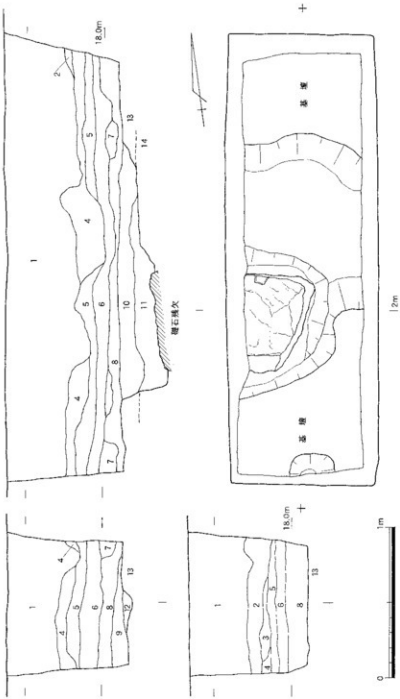


図8　2区　土層断面図、13層上面平面図

遺物

1区と2区を合わせた出土遺物の点数はおよそ1000点である（表1）。調査地の性格を反映してその殆どが瓦であり、しかも1区出土の瓦の量が全出土遺物に対して約84%の比率を占めている。そこで、以下では1区出土の瓦を中心に概略を報告する。

瓦（図9～13、表1・2）

1区から出土した瓦の破片は875点を数える。このうち376点と最も多くが17層から出土して

いるが、これらは１区西端に設定した側溝および17層上面の精査中に出土したものである。なお出土した瓦は軒丸瓦、丸瓦、平瓦、不明の４種である。

軒丸瓦は16・17層から破片が５点出土しており、瓦当文様はいずれも三巴文である。小片のため巴文の頭部や尾部の特徴を観察できないが、外区の連珠文には間隔が狭いもの（32）とやや広いもの（31・33）が見られる。

丸瓦は100点程が出土している。小片が多く、形状が分かるものは少ない。その中では行基葺きの丸瓦（41）が多く、玉縁の付いた丸瓦（40）は少ない。

平瓦は700点程が出土している。平瓦も小片・砕片が多く、調整方法などがはっきり分かる資料は少ないが、特徴を留める個体について凹面における布目の有無や凸面のタタキ痕の違いによって大まかに分類すると、ａ類：凹面無・凸面無、ｂ類：凹面有・凸面無、ｃ類：凹面有・凸面縄目、ｄ類：凹面有・凸面縄目（鋸歯状）、ｅ類：凹面有・凸面平行線、ｆ類：凹面有・凸面斜格子に区分

調査区	層位	瓦	土師器	須恵器	土師質土器	瓦器	陶磁器	その他
1区	1層	4	1				2	貝殻1、万博メダル1
	2層	3	3		4	1	2	貝殻多数、ガラス瓶1
	8層	1	2				14	貝殻多数、ガラス瓶1
	14層	50	6	1			1	
	15層	31	5	7	1		6	
	16層	287	4		1			凝灰岩1、壁土20、サヌカイト1、鉄片1、鉄釘2
	17層	376	4	1				
	18層	119	7					ガラス玉1、鉄釘1
	19層	4						土製円盤1、粘土塊1
	合計	875	32	9	6	1	23	
2区	1層	2	1				2	
	6層	1	9	4		1	2	
	10層	5	7	1			2	
	合計	8	17	5		1	6	
調査地	表採	1						

表１　１区・２区出土遺物数量表

層位	軒丸瓦	巴文	丸瓦	行基	玉縁	平瓦	a類	b類	c類	d類	e類	f類	不明	合計
1層	0		1			3	1		2				0	4
2層	0		0			3	3						0	3
8層	0		0			1	1						0	1
14層	0		8			31	22		9				11	50
15層	0		4			27	5		4				0	31
16層	3	3	26			198	38	15	13	3	4	3	60	287
17層	2	2	48	7	2	310	16	36	69	9			16	376
18層	0		18	1		101	1	46	28	12			0	119
19層	0		0			4	3	1					0	4
合計	5	5	105	8	2	678	90	98	125	24	4	3	87	875

表２　１区出土瓦数量表

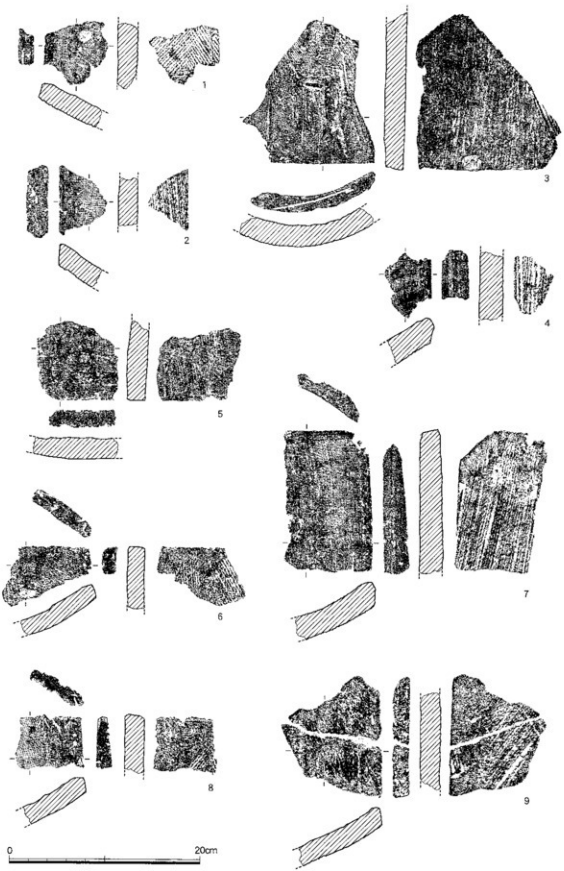


図９　１区18層出土の瓦

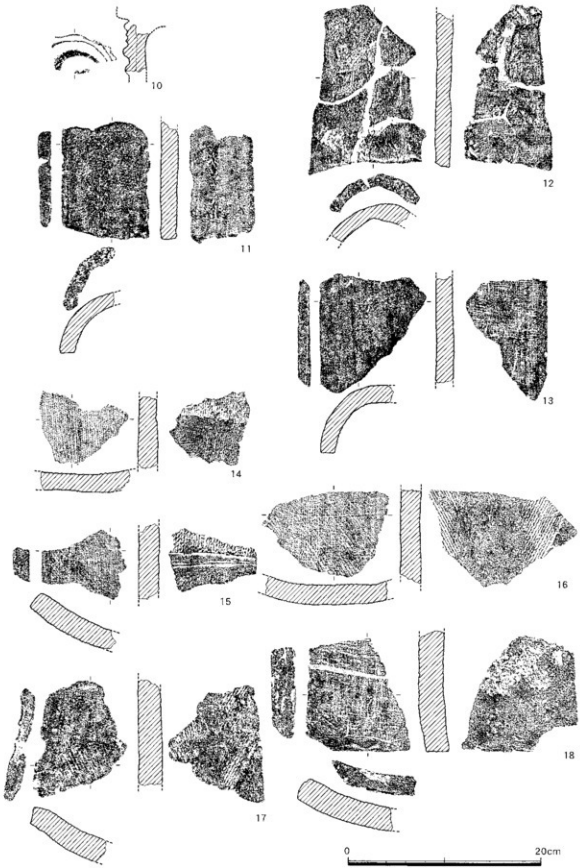


図10　1区17層出土の瓦①

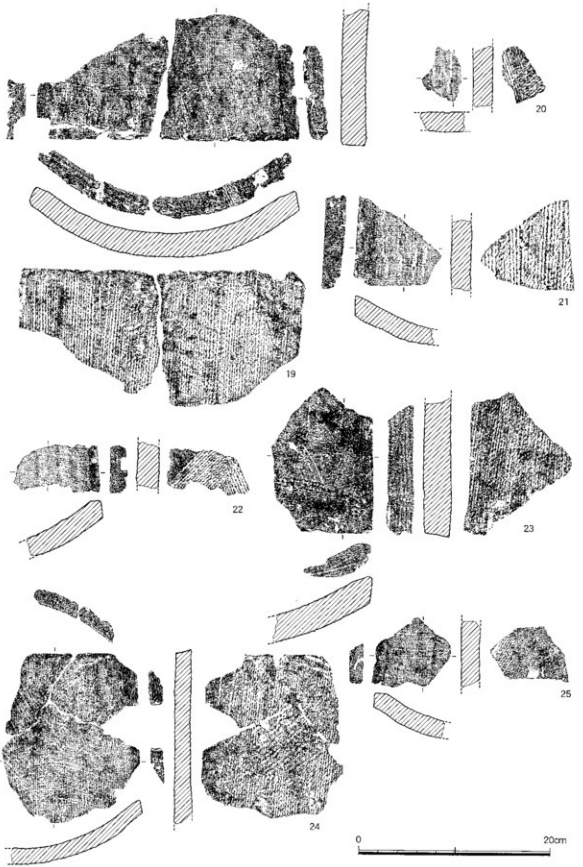


図11　1区17層出土の瓦②

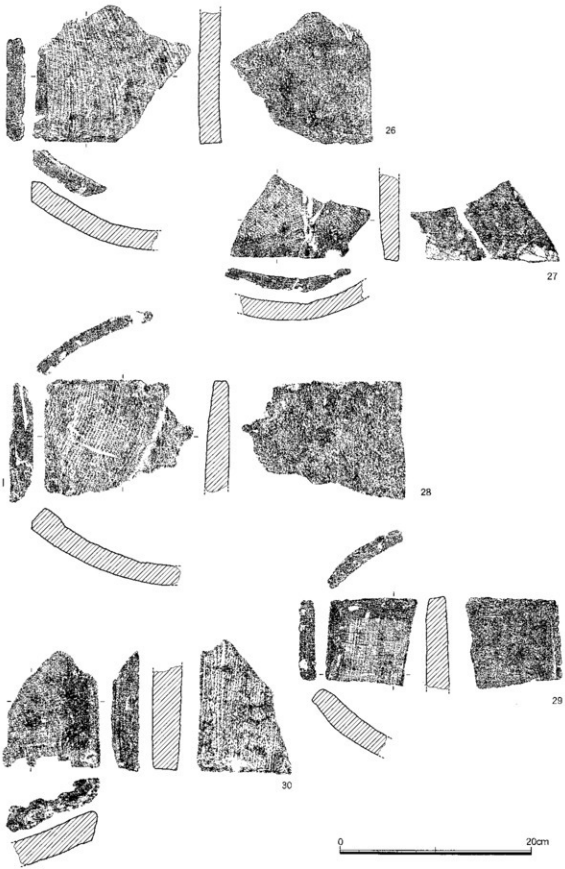


図12　1区17層出土の瓦③

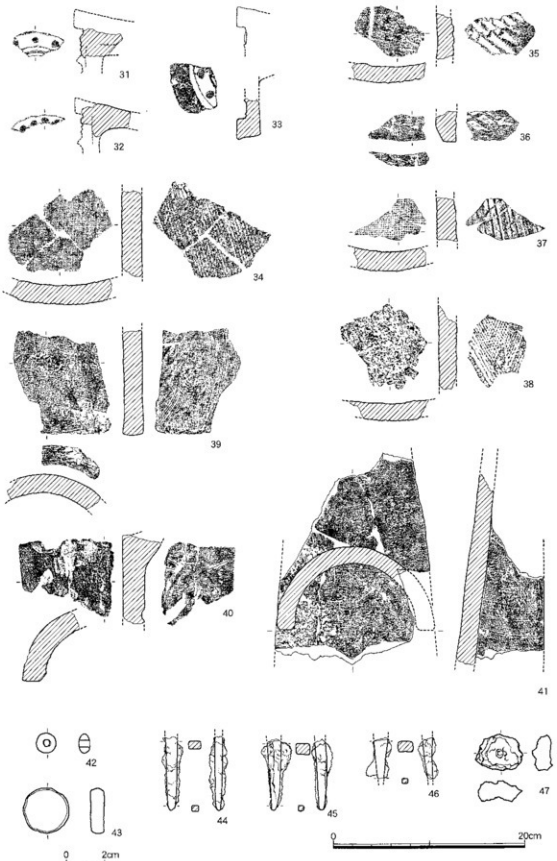


図13　1区14層(34)・16層 出土の瓦、その他の遺物

できる。ただし凸面無とした個体については小片のために全体の状況を把握し難く、特にｂ類のように凹面有とした個体には本来ｃ類もしくはｄ類に分類されるべき個体が相当数含まれているようにも思われる。したがって、例えば類型間の数量比較を行う場合にはａ類：ｂ＋ｃ＋ｄ類：ｅ類：ｆ類とすべきかもしれない。

そうした視点で出土点数の多い16～18層の平瓦を比較すると、各層での調査面積の違いがあり単純に出土点数を比較することは難しいが、下層の18層では凸面を縄タタキ調整した平瓦が殆どであり、17層になると凹面に布痕が無く凸面を丁寧にナデ調整した平瓦が増加し、16層では同瓦がより多く出土することが指摘できる。平瓦の年代を知るには形状・大きさ・調整方法や離れ砂の有無など製作技法も検討しなければならないが、大まかに見れば（ｂ）・ｃ～ｆ類の平瓦は奈良時代以前の瓦であり、ａ類には巴文軒丸瓦が示すように中世の瓦が多く含まれているものと考えることができる。つまり、東塔基壇の西側では雨落ち溝を覆うように瓦が厚く堆積し、その下部では奈良時代以前の古い瓦が多く、その上部では中世と考えられる新しい瓦が多く出土していることになる。

平瓦凸面のタタキ痕は、平行線文(35・37、ただし35は綾杉文の可能性もある)や斜格子文（36）が僅かに見られるものの、その大半が縄目文であることも大きな特徴である。太平寺廃寺周辺の古代寺院で使用された平瓦には格子文や有軸・無軸綾杉文などのタタキ痕をもつ例も多いが、今回の調査区から出土した平瓦にはこうした文様は見られなかった。また縄目文の中には タタキ板の方向を変えて鋸歯状に縄目を施したものも少なからず存在するが、これらの凹面には布目と桶の側板の痕跡（模骨痕）が見られ、桶巻き作りで製作されていることが分かる（6・9・16・22など）。

壁土（写真図版９－２）

16層において壁土塊が出土していることは注意しておかなければならない。これらの壁土はいずれも火を受けているが、16層の上層に当たる15層でも焼土や炭化物粒が見つかっており、ここに存在した建物が火災に遭って倒壊したことを示しているように思われる。

その他の遺物（図13）

ガラス小玉（42）が18層から出土している。淡緑色を呈し、直径１㎝・高さ６㎜・重さ 1.1ｇを計測する。

土製円盤（43）が19層から出土している。橙色を呈し、胎土には砂粒が多く含まれる。材料は土師器片であろうか。直径 2.4㎝・高さ７㎜を計測する。

鉄釘片が16層（45・46）と18層（44）で出土している。44は先端部が残る破片で、断面形は長方形を呈し、重量は33.6ｇである。45も先端部が残る破片で、断面形は長方形を呈し、重量は45.1ｇである。46は頭部・先端部とも欠く破片で、断面形は長方形を呈し、重量は17.8ｇである。

鉄片（不明鉄製品）が16層から出土している(47)。錆の部分が多く形状は不明である。重量は40.6ｇを計測する。

智識寺東塔の復元（図14・15）

ここでは以上の調査成果と昭和55年の大阪府教育委員会の調査成果を照合し、智識寺東塔の規模

や基壇形式について検討する。なお、大阪府教育委員会の調査成果および平面図は調査時に発行された現地説明会の資料に依拠していること(註1)、また、こうした作業を進めるには両調査区の平面図を正確に結合させるための基準点が必要になるが、残念ながらこうした測量上の基準点が見当たらないため調査対象地の形状や北側市道との距離を基準にしていることなど、厳密に照合するには問題点も多く、その結果は概略・概数であることを予め断っておきたい。

大阪府教育委員会の調査は東塔基壇の北西部に当たり、北辺・西辺の雨落ち溝、雨落ち溝外周の石敷き、雨落ち溝北西隅内側に据えられた小礎石、側柱北西隅礎石抜き取り穴および北辺中央間西脇柱礎石抜き取り穴が検出されている。これらの調査成果をもとに、藤澤一夫氏が東塔について復

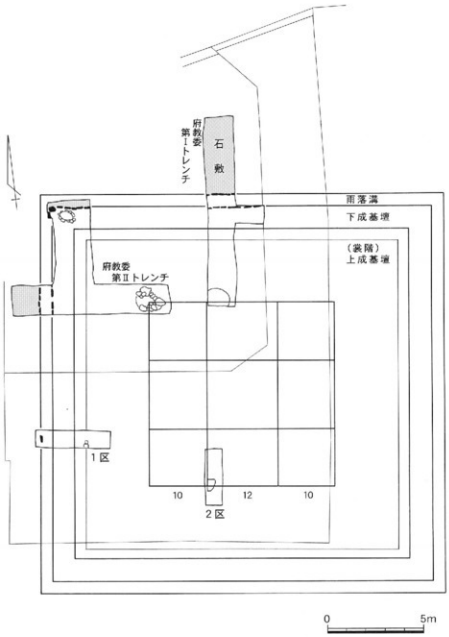


図14　東塔基壇平面の復元案

元されており、軸部初層柱間12尺（3.6m）、同じく初層一辺長36尺（10.8m）、二重基壇（藤沢氏は重成基壇、また報告では下成部を犬走りとしている）、軒を支える下成基壇隅部の柱などを推定されている（註2）。

まず基壇の形式に関しては、遺構の断ち割り調査等を避けたため今回の調査でも明らかにすることはできなかったが、大阪府教育委員会の調査による基壇断面の土層の状況や雨落ち溝内側の小礎石の存在などから判断して、藤澤案のように二重基壇の可能性が高いように思われる。

軸部初層の規模に関しては、礎石位置あるいは柱位置が問題になるが、大阪府教育委員会の調査では礎石抜き取り穴の検出に留まっているため明確にすることは難しい。ただし、今回の調査では2区において軸部南辺の側柱を受けたと思われる礎石が検出されたので、とりあえず抜き取り穴の位置と照らし合わせると、軸部初層の一辺長は約9.6mとなる。軸部初層の柱の構成は当然3間×3間であるが、飛鳥・白鳳期の塔の柱間寸法は中央間が脇間に比べて広いとされており、この原理を当て嵌めると、柱間は等間隔ではなく脇間（10尺）・中央間（12尺）・脇間（10尺）になるかもしれない。

次に、今回の調査結果から基壇に関して最も問題になる点は凝灰岩石列の時期と性格であろう。その形状や上面の枘穴？の存在から判断して地覆石のような役割をもった石列と考えられるが、はたして東塔基壇に付属する遺構であるのか、あるいは大阪府教育委員会の調査で報告された中世の建物に伴う遺構であるのか、現状では判断が困難である。今回の調査においても巴文軒丸瓦が出土しているように、この付近に中世の瓦葺建物が存在したことは間違いないが、少なくとも石列に関しては大阪府教育委員会の調査では検出されていない。ここでは、根拠に乏しいが東塔基壇に伴う凝灰岩石列と捉えておきたい。その場合、塔の軸部でもない位置にこうした石材を据えることが基壇あるいは塔の構造と齟齬を来たさないか問題になるが、塔の初層に裳階が付いていたと考えれば解決できるように思われる。すなわち、石列は二重基壇の上成部の縁近くに据えられて裳階の壁を受けていたことになる。

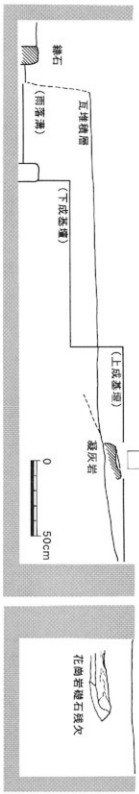


図15　東塔基壇立面の復元案

以上のように推測すると智識寺東塔については次のように考

えられる。基壇形式は二重基壇で、下成部の一辺長は約19.8m、上成部の一辺長は17.4m、（基壇の全体高は約55㎝）。軸部については、初層は３間×３間で一辺長は約 9.6m。裳階が付き、その一辺長は約16.3m。初層の軒の出は、側柱筋から雨落ち溝内側までの距離で約５mになる。かなり深い軒の出であり、下成基壇隅部の小礎石が示すように、軒の四隅には屋根を支えるための支柱が添えられていた。こうした規模からみて東塔は五重塔であり、基壇形式や軸部初層の構造から推測するとその姿は現在の法隆寺五重塔に近い。ただし軸部の初層平面規模は現在の興福寺五重塔よりも大きく、より壮大な塔であったと思われる。

まとめ

今回の調査では、標高およそ18ｍの高さ以下（調査時の地盤面から深さ約70㎝）で、奈良時代の正史である『続日本紀』にも記された智識寺東塔の基壇が遺存していることが判明した。心柱礎石は過去に持ち出され、その他の礎石も殆ど失われているが、それでも一部には今回のような礎石の残闕も遺っており、基壇周辺の瓦の堆積や雨落ち溝なども考え合わせると、基壇は良好に遺存していると評価して良いであろう。加えて巴文軒丸瓦や平瓦など中世に降る遺物も出土しており、調査地およびその周辺は、古代の智識寺や中世の太平寺を知るために極めて重要な場所である。調査地は大阪府史跡に指定されており、今後とも遺構の保護に厳格に努めることが我々の責務である。

註

1　大阪府教育委員会『太平寺廃寺発掘調査現地説明会資料―柏原市太平寺２丁目所在―』　1980

2　藤澤一夫「日本の百濟系双塔伽藍―双塔様式の伽藍系譜（１）―」『馬飼・百濟文化』第四・五輯　嶋光大学校馬韓・百濟文化研究所　1982

第３章　安堂遺跡、安堂廃寺

図16　調査地位置図（図１の③）

安堂遺跡　2007-1次調査

・調査対象地　安堂町899～902/904-1/905-1の一部
・調査期間　2008年1月17日～2月19日
・調査面積　164.00㎡
・調査担当者　桑野一幸

調査区の設定（図17）

調査地は安堂遺跡の北東端に位置する標高34～35mの西に降る緩やかな斜面地であり、調査前はブドウ畑として利用されていた。すぐ東側はかなり高い擁壁を隔てて市立堅下南小学校のグランドが広がり、西側では以前の発掘調査によって周辺が谷状地形であったことが確認されている。また調査地南側の低地には安堂廃寺（奈良時代の家原寺跡）、北側の小尾根上には古墳や飛鳥～奈良時代の建物群・奈良～平安時代の火葬墓群、さらに北側の低地には太平寺廃寺（奈良時代の智識寺跡）が知られている。

調査地の形状は南北に長く、南北70m×東西30m程の広さであるが、中央部には東西方向の水路と小学校への通学路が通っている。

今回の調査では中央部通学路の南側で6箇所、北側で3箇所の調査区を設定した。

1～6・8・9区の概要
（図18・21、表3）

1～3・5・9区では遺物・遺構は検出されなかった。地山は比較的浅い位置にあり、地山は風化して砂質化・粘土化した花崗岩である。

4・6区では最下層の北西部で土師器片・須恵器片・埴輪片が僅かに出土

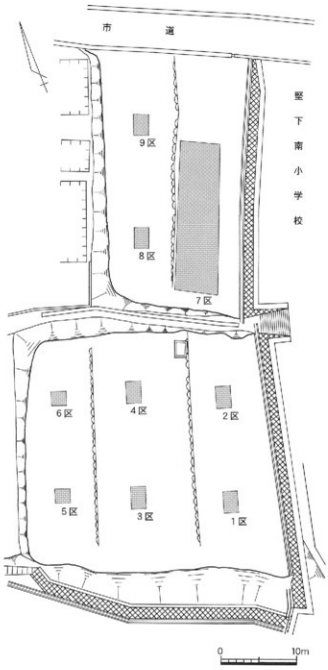


図17　調査区位置図

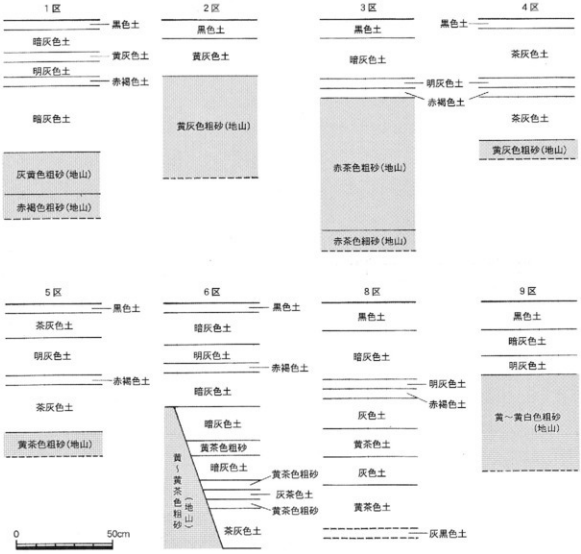


図18　各調査区土層概略図

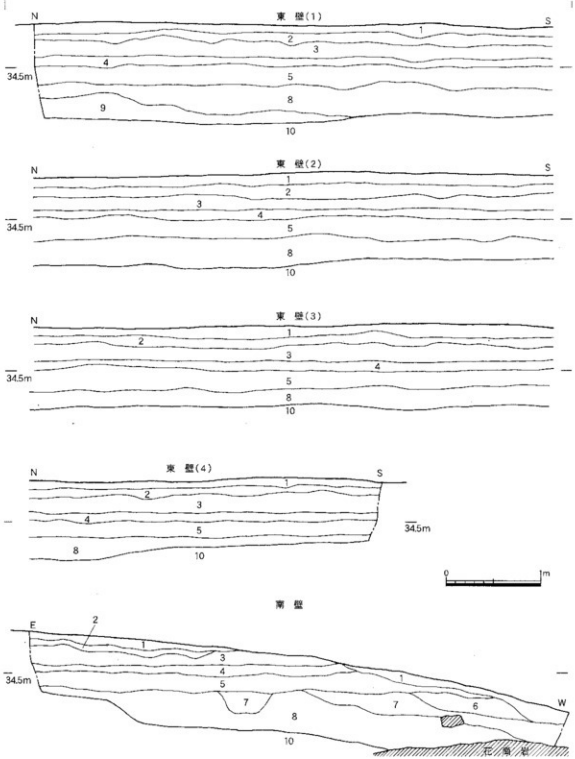
した。遺物が出土した土層は中央部水路に向かって落ち込む谷状地形の埋土である。

8区では地表から1m以上の深さにある黄茶色土層や灰黒色土層から小片・砕片になった土師器片や須恵器片が出土した。図21の杯（1）・蓋（2）・皿（3）・鉢（4）は最下層の灰黒色土層から出土したものである。皿と鉢の外面上半部にはミガキ、下半部にはケズリ、内面には暗文が見られる。比較的大きな破片であるが出土時には砕片化しており、遺構は検出されなかった。

なお各調査区において酸化鉄が沈着して赤褐色の色調を帯びた土層が見られることから、調査地全体が水田として利用されていた時期があったことが分かる。

7区の概要（図19・20、表3）

7区は南北20m×東西5.5m程の南北に長い調査区である（図20）。地山は花崗岩の巨塊あるいは砂質化した花崗岩風化土であり、地表から30～50cmの深さで検出され、南北方向は平坦面、東西方向は西に緩やかに降る斜面である（図19）。



1. 黒（10Y2/1）細砂　表土
2. 黄褐（2.5Y5/3）細砂
3. 灰（5Y5/1）細砂　細礫・炭化物粒を含む
4. 明褐色（7.5YR5/8）細砂　酸化鉄が強く沈着する
5. 灰（5Y4/1）細砂　粗砂・細礫を含み、Mn斑紋顕著
6. にぶい黄褐（10YR4/3）細砂
7. にぶい黄褐（10YR4/3）細砂　地山土をブロック状に含む
8. 黄灰（2.5Y4/1）細砂　細礫・炭化物粒を多く含む　遺物多い
9. 黄褐（2.5Y5/6）粗砂　礫～中礫を多く含む
10. 明黄褐（2.5Y6/6）細砂　粘性が強く、花崗岩等を含む　地山

図19　7区土層図

地山を覆う８層（９層）は６・７世紀の土師器片や須恵器片を相当量含む遺物包含層である。地山の傾斜にほぼ沿って堆積しているが、地山面における遺構等の状況が把握できていないため、他所から運び込まれた可能性もある。また６・７層は、存在する範囲が斜面下方に当たる調査区西側に限定されるため、水平面を確保するために客土された整地土層と考えられる。さらに５層から上層はいずれも水平堆積であり、中には酸化鉄やマンガンが強く沈着する土層も見られることから、ここまでに確保された平坦面を利用して畑・水田・ブドウ畑などが営まれた耕作土層と思われる。

なお５層には殆ど遺物が含まれていないが、その上面では、調査区南半部において南北 5.7m×東西 1.7m程の広がりをもつ瓦溜りが検出された（図20）。先述したように５層から上層は耕作に伴う整地土層であり、したがってこれらの瓦も他所から持ち込まれた（あるいは廃棄された）可能性が高い。落ち込み等は認められなかったが、古代の瓦を多量に含む土砂を５層上面の僅かな窪地に運び込んだのであろう。

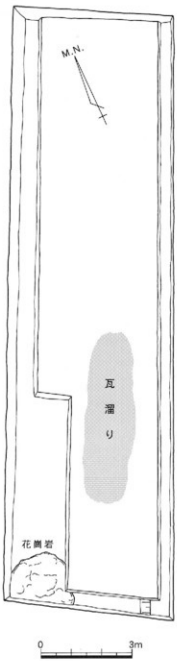


図20　７区平面図

７区出土の遺物（図21～27、表３～５）

７区からは表３に示すように土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・埴輪・瓦・鉄滓・その他の遺物が1800点あまり出土している。土師器・須恵器と瓦の小片がほとんどであるが、このうち前者は８層から、後者は５層瓦溜りから大半が出土している。

９層（表３）

地山の直上である９層からは土師器・須恵器・丸瓦・不明石製品（安山岩製）・サヌカイト剥片が僅かに出土している。いずれも小片・砕片である。

８層（図21・27、表３）

８層からはおよそ500点の土師器と100点の須恵器に加え埴輪・瓦・鉄滓・石製品などが出土したが、いずれも小片・砕片で図化できる遺物は少なかった。

５・６は土師器の甕、７は同じく高杯。８～17は須恵器の蓋杯、18は同じく台付盤。23はにぶい黄橙色の円筒埴輪。外面にはナナメハケ→ヨコハケ調整が見られる。24も橙色の円筒埴輪。外面にはタテ・ナナメハケ調整が見られる。28は安山岩製の不明石製品。受熱しており、平面形は直径62cm程の円形に復元できる。60は鉄滓。椀形を呈し、外底面には土師器片が付着する。重量は295.4ｇを計測する。

調査区	層位 遺構	土師器	須恵器	瓦器	陶磁器	埴輪	瓦・塼	鉄滓	その他
4区						3			
6区		25	4		2				
8区		105	19		1	1	1		
7区	5層	4							
	5層 瓦溜り	73	42	3		5	901	2	不明土製品6、棒状土製品1、砥石2、
	7層	41	21			1	9	1	鉄釘1、近代瓦2
	8層	487	108		1	5	11	14	不明石製品2
	9層	20	4				1		不明石製品2、サヌカイト剥片1
合計		755	198	3	4	15	923	17	

表3　調査区別出土遺物数量表

7層（図21・23・27、表3）

7層からは土師器・須恵器・埴輪・平瓦・鉄滓が出土している。いずれも小・砕片である。

22は須恵質の円筒埴輪。外面にはタテハケ調整が見られる。43は無軸綾杉文タタキが見られる平瓦。灰色を呈し、桶巻作りである。51は塼か。文様は無く、厚さは2cmを測る。色調は灰白色を呈し、焼成は堅緻、胎土は精良である。58は鉄滓。楕形滓で、内底面には炭が付着し、重量291.8gを計測する。

5層瓦溜り（図21～27、表3～5）

瓦溜りからは900点程の瓦を中心に土師器・須恵器・その他の遺物が出土している。いずれも小・砕片であり、多量に出土した瓦でも完形あるいは完形近くに復元できる資料は見られなかった。

19～21は不明土製品。瓦質で、色調は灰白色～灰黒色を呈し、胎土には石英・長石粒を多く含んでいる。器面は強いナデ調整あるいはケズリ調整で、太い隆帯も削り出されたものと見られる。26・27は砥石。いずれも小形品で、26は軽石、27は石英粗面岩。25は棒状の土製品。やや扁平で湾曲しており、何かの把手あるいは形象埴輪の一部の可能性もある。59は鉄滓。厚さ5cmの楕形滓。暗灰色を呈する内底面は溶融して平滑になっている。重量は355.2gを計測する。

多量に出土した瓦の内訳は軒丸瓦3点、丸瓦326点、平瓦540点、鴟尾1点、不明31点の合計901点である（表4）。

軒丸瓦はいずれも素弁八葉蓮華文軒丸瓦である（29～31）。小片であるが、瓦当の直径は16.7cm程度に復元できる。中心部分は欠損しているが他の出土例から1＋8の蓮子が配される中房であろう。また周縁部の外周には隆線あるいは段が認められることから、瓦当部と丸瓦部を接合した後に

層位	遺構	軒丸瓦	（素弁八葉）	丸瓦	（行基）	平瓦	鴟尾	塼	不明	備考
5層	瓦溜り	3	3	326	27	540	1		31	
7層						7		1	1	
8層						7			4	
9層				1						
合計		3		327		554	1	1	36	

表4　7区出土瓦数量表

層位	遺構	a類	b類	c類	d類	e類	f類	g類	h類	i類	j類	k類	l類	m類	備考
5層	瓦溜り	17	1	440	1	2	1	1	14	1	7	2	3	50	
7層				5				1	1						
8層		4		2										1	
合計		21	1	447	1	2	1	2	15	1	7	2	3	51	

表5　7区出土平瓦タタキ文様別数量表

周縁部を補充した可能性がある。色調は黄橙色・にぶい褐色・橙色を呈し、焼成は比較的良好であり、胎土には石英・長石・くさり礫の細砂～細礫が含まれている。この軒丸瓦は調査地周辺で比較的多く知られており、太平寺廃寺（智識寺跡）・安堂廃寺（家原寺跡）・太平寺遺跡・安堂遺跡等で出土している（註）。年代については7世紀後葉に属するものであろう。

丸瓦は約300点の破片が出土しているが、個々を結合し重ねるための玉縁が付く丸瓦は無く、確認できる資料ではいずれも一端が細くなる行基葺きである（表4）。54～57はその丸瓦である。全長を確実に復元できる資料は無いが、55はほぼ完形に近く長さは38cm程である。凹面には布目が見られ、凸面は縄タタキの後に丁寧にナデ調整される資料が大半であるが、丸瓦の中には56、57のように数は少ないが縄目以外のタタキ調整が施されている例も見られる。

平瓦は540点出土している。その凸面にはタタキ調整の痕跡が遺されているが、それらをまとめると次のように区分できる。

a類：斜格子文。格子目が大きく、タタキ板の幅は約8cmで、格子以外の隆起線が1本見られるのが特徴である。（33・34）

b類：斜格子文。格子目が小さい。（32）

c類：有軸綾杉文。タタキ板の幅は約8cm。タタキ板には綾杉文右半部中程の刻線の中に微細な隆起線が見られるもの（36・52）と見られないもの（35・37）があり、2つの個体を弁別することが可能である。両者の数量的な違いは明確ではないが、印象としては前者のほうが多いようである。

d類：有軸綾杉文。タタキ板の幅は約7cmで、c類よりも若干小さい。（38）

e類：有軸綾杉文。綾杉文を構成する陰刻線の傾きがc・d類に比べて緩い。（39）

f類：有軸綾杉文？。綾杉文を構成する陰刻線の幅がc～e類に比べて広い。（40・41）

g類：無軸綾杉文。タタキ板の幅は約7cm。綾杉文を構成する陰刻線の底面は、有軸綾杉文系では断面形がV字状になることが多いが、この無軸綾杉文では平坦である。（43・44）

h類：縄目文。斜め方向の太く粗い縄目が特徴である。粘土が軟らかい間に強く叩かれたのであろうか、縄の刻線は深く、その縁は粘土が盛り上がっている。（45・53）

i類：縄目文。鋸歯状に遣る細い縄目が特徴である。凸面全体に縦方向に縄目タタキが施され、それらをナデ消した後で縄目タタキをジグザグに施したものと思われる。（47）

j類：縄目文。縦方向に細い縄目が見られる。（46）

k類：縄目文。j類のうち平瓦狭端部付近をナデ消したもの。（48）

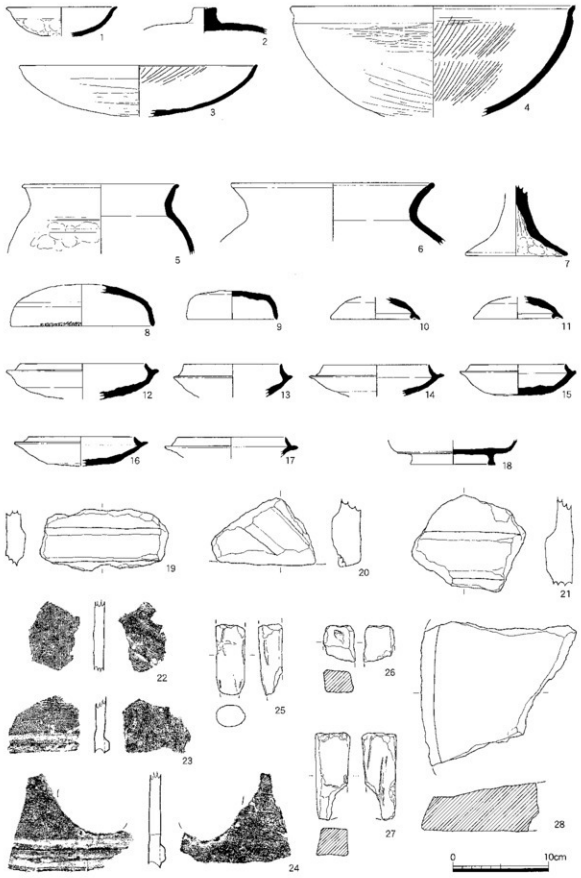


図21　7区・8区出土の遺物（1～4は8区）

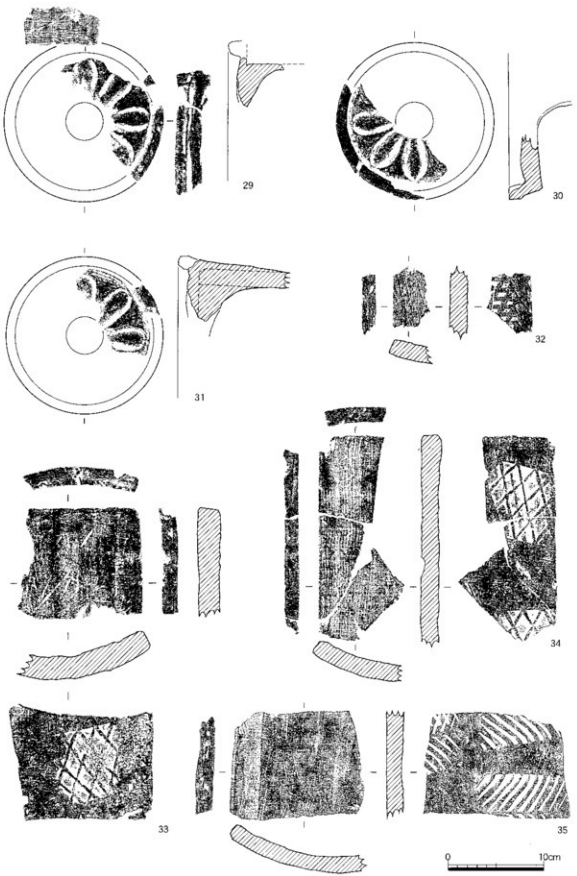


図22　7区出土の軒丸瓦・平瓦

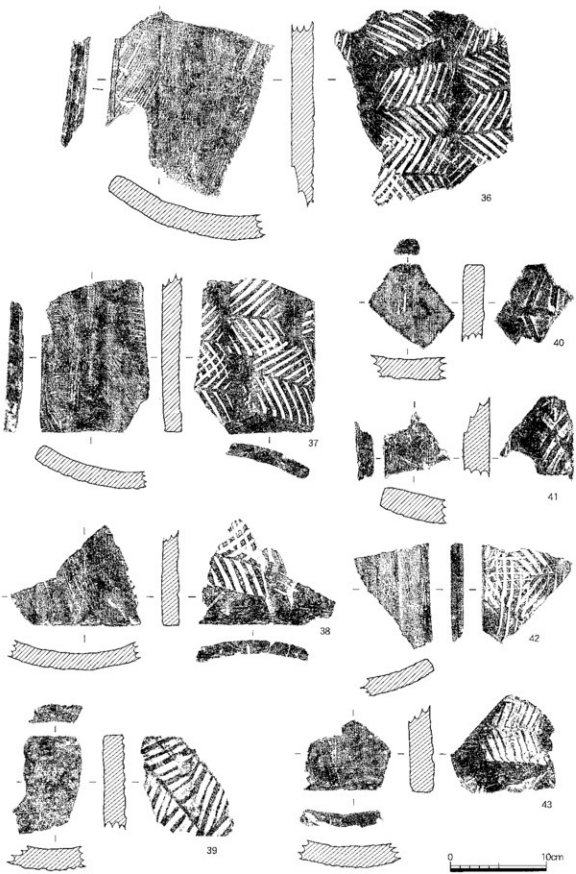


図23　7区出土の平瓦

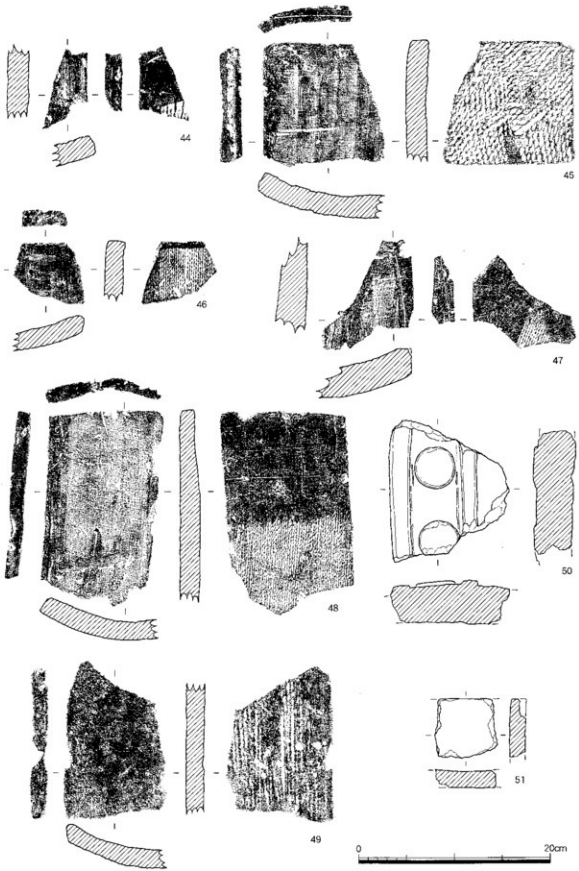


図24　7区出土の平瓦・鴟尾・塼

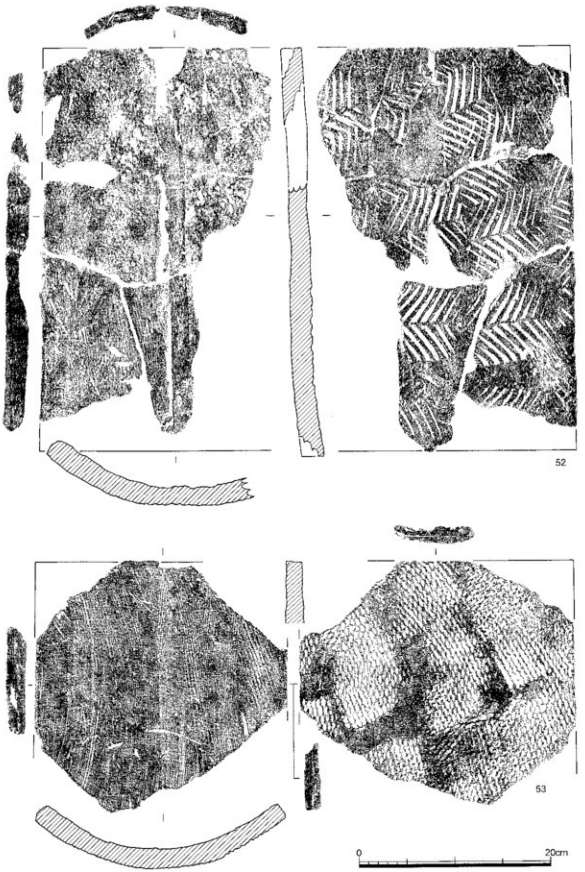


図25　7区出土の平瓦

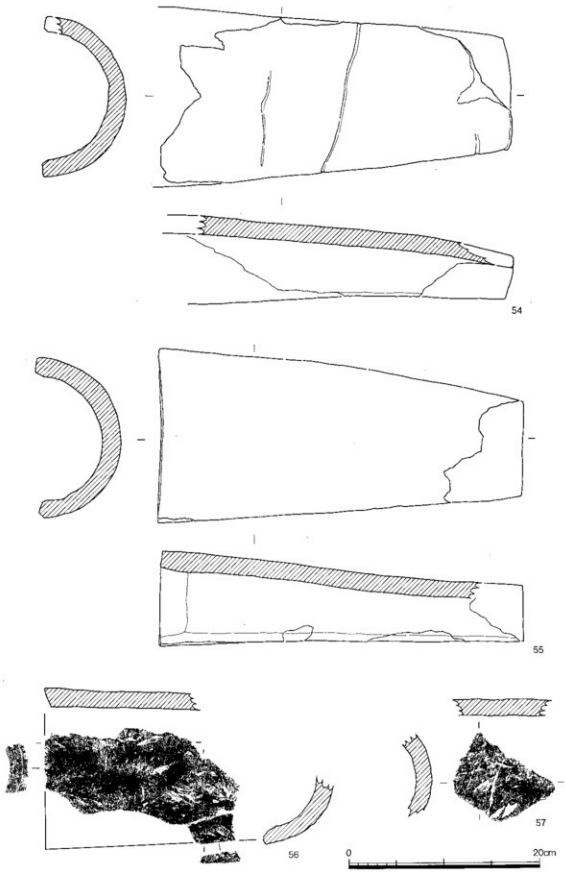


図26　7区出土の丸瓦

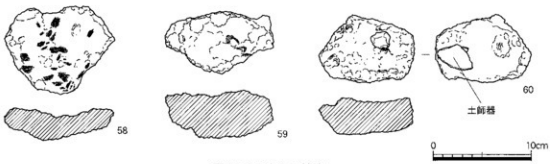


図27 7区出土の鉄滓

l類：縄目文。縦方向の太い縄目が特徴である。（49）

m類：タタキ文様が不明なもの。

このようにm類を除くと13種類のタタキ文様を区別することができる。また42は有軸綾杉文・無軸綾杉文タタキが併用された平瓦である。

これら13種類の平瓦タタキ文様を数量的に整理すると、c類の有軸綾杉文の出土量が440点であり、平瓦全体の約81％を占め、その他に僅かに斜格子文と縄目文が見られるという状況である（表5）。平瓦の大きさについては、いずれも小片のため明確ではないが、例えばc類（52）は全長42.8㎝、h類（53）は残存部の幅で26.2㎝を計測する。また平瓦の製作方法については、平瓦のほとんどが小片であることに加え摩滅している資料も多いため、その凹面の特徴について数量的観察を行ってはいないが、l・（m）類を除くと粘土を巻きつけた桶の側板の痕跡（模骨痕）が見られる資料あるいは側板の痕跡（模骨痕）を削り取った資料が多いので、a類～k類のタタキ調整が施された平瓦は桶巻作りと思われる。なお、図示していないがc類平瓦の中で1点だけ短辺に平行に朱が付着した資料がある。おそらく軒先の茅負の部位に使用されたものであろう。これら平瓦の年代は、その多くが7世紀後葉～8世紀初頭に属するものと思われる。

50は鴟尾の破片。円形浮文と隆帯が見られ、鴟尾の縦帯および連珠文に相当する部位の破片であろう。全体に欠損しており鰭部の段などは見られない。色調は灰黄褐色を呈し、焼成はやや軟、胎土には砂粒が多く1～5㎜大の長石・石英・チャート粒が顕著である。今までのところ、調査区に近い太平寺廃寺（智識寺跡）や安堂廃寺（家原寺）からは同様の鴟尾は出土していない。

まとめ

調査地の旧地形については、今回および過去の調査から南半部は尾根状、北半部は浅い谷状の地形であったと考えられる。そして、可耕地を確保するために南半部では削平、北半部では埋め立てが進行し、ある時期から水田（棚田）として、その後はブドウ畑として近年まで土地利用が行われていた。多くの遺物が出土した7区においても、調査が十分に及んでいないため下層出土資料の歴史的位置付けは保留したいが、上層瓦溜り出土の多量の瓦はこうした土地利用の過程で客土された土砂とともに他所から持ち込まれたものである。

これらの瓦の出所はもちろん1箇所であったという保証は無いが、その中に屋根の茅負部に葺か

れていたと考えられる平瓦が存在することから、少なくとも瓦窯等の製作場所ではなく寺院等の使用場所から持ち込まれたものと思われる。候補地としては、調査地周辺では北側の尾根で大形の柱穴をもつ掘立柱建物は知られているものの、礎石を伴うような瓦葺き建物は見つかっていないので、立地としては調査地よりも低い場所になるが太平寺廃寺（智識寺跡）や安堂廃寺（家原寺跡）が挙げられる。軒丸瓦や平瓦の特徴もこれらの寺院跡からもたらされたと考えることに問題はないだろう。いうまでもなく、これらの瓦は既に報告したような来歴から一級の歴史資料とは認め難いが、飛鳥時代の後半から奈良時代にかけて、仏教に帰依した知識衆によって建立された寺院や天皇の行宮（智識寺南行宮）など官衙的施設も営まれていた地域の古代史を知る上で参考にできればと考える。

註

以下の文献に掲載されている。

- 大阪府教育委員会、柏原市教育委員会『柏原市東山地区における遺跡分布調査報告書　－国道25号線建設に伴う埋蔵文化財予察報告書－』　1980
- 柏原市歴史資料館『柏原の古代寺院址』　1985
- 柏原市教育委員会『柏原市遺跡群発掘調査概報Ⅱ　－太平寺・安堂遺跡－』　1988
- 柏原市教育委員会『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報　1994年度』　1995
- 柏原市立歴史資料館『河内六寺の輝き』　2007

安堂廃寺　2007-1次調査

・調査対象地　安堂町674

・調査期間　2007年12月6日

・調査面積　1.00㎡

・調査担当者　桑野一幸

調査地は安堂の旧居村域を東西・南北（業平道）に貫く旧道の交差点（四辻）にあたり、正休寺の東側に位置している。北側隣接地は安堂廃寺2004－１次調査地であり、溜池の痕跡が検出され、その埋土から安堂廃寺（家原寺跡）に伴う多量の瓦類が出土している。

今回の調査では対象地の北側に１m四方の調査区を設定し、掘削・精査した。地表から調査対象深度までは全て現代の盛土であり、遺物・遺構は検出されなかった。

図28　調査区位置図

第４章　高井田遺跡

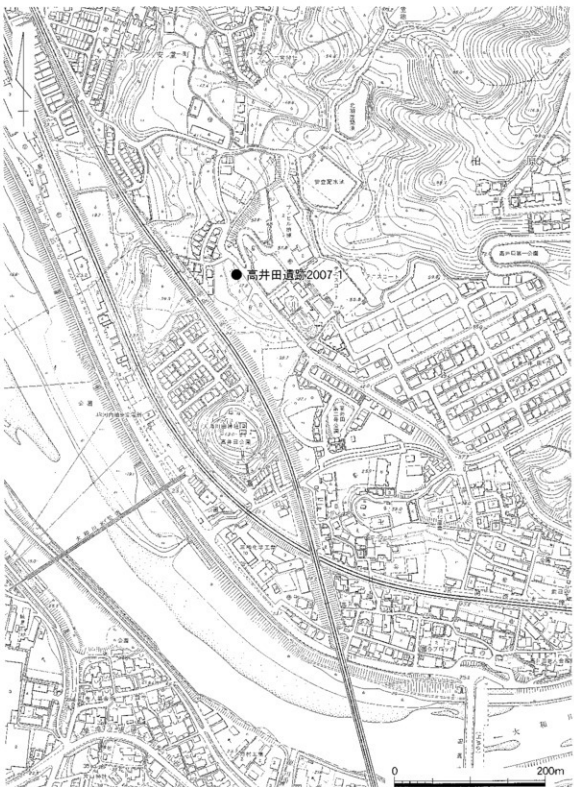


図29　調査地位置図（図１の④）

高井田遺跡　2007-1次調査

・調査対象地　高井田地内
・調査期間　2007年11月15日～11月16日
・調査面積　2.58㎡
・調査担当者　桑野一幸

高井田遺跡は柏原市のほぼ中央部に位置し、西流する大和川が玉手山丘陵に行く手を遮られて北西に流路を向ける変換点に臨む山地斜面に立地している。標高はおよそ40～100 mを測り、6世紀末葉～8世紀初頭にかけて、斜面を雛壇状に造成して次々に建てられた掘立柱建物（住居・倉庫）を主体にした集落遺跡であり、遠くは河内平野や大阪湾を一望するとともに、近くは古代における交通上の一大動脈であった大和川（あるいは航行する船舶や土手上を往来する人馬）を指呼の間に望むことも可能である。鳥取氏の居住地と推定され、遺跡の南に隣接して鳥坂寺（『続日本紀』に登場する河内六寺の一つ）が建立されている。

今回の調査は「サンヒル柏原」（大阪府国民年金健康保養センター）前の市道に歩道を敷設する工事に伴い実施し、４箇所の調査区を設定、人力で掘削・精査した（図30）。いずれの地区においても地山はシルト～粘土化した花崗岩であり、2・3区において地山に接して土師器や須恵器の小片を僅かに含む極薄い遺物包含層が見られた。また、4区では地山面で円形と方形の小ピットを検出したが、その時期や性格は不明である。

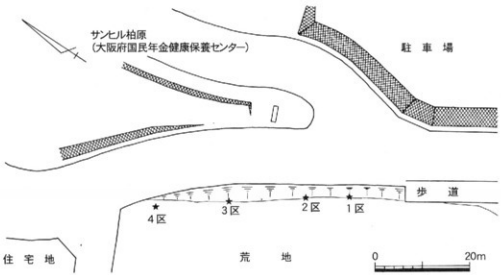


図30　調査区位置図

第５章　玉手山東横穴群

図31　調査地位置図（図１の⑤）

玉手山東横穴群　2007-1次調査

・調査対象地　旭ヶ丘2-376-1/他

・調査期間　2007年7月23日～9月18日

・調査面積　84.50㎡

・調査担当者　桑野一幸、島内洋二

横穴は古墳時代の墳墓の一種であり、大阪府下では柏原市域に位置する国史跡の高井田横穴群、府史跡の安福寺横穴群、そして玉手山東横穴群の３つの横穴群がよく知られている。ここで報告する玉手山東横穴群は、古墳時代前期の前方後円墳群として知られる玉手山古墳群が営まれた玉手山丘陵の東斜面に立地し、玉手山８・９号墳の付近から東に派生する小尾根によって形成された谷筋に築かれている。昭和30年頃に発見され、昭和43年の土取り工事に際して大阪府教育委員会によって調査が行われた。

現在見られる地形は土取り工事によって旧状を留めていないが、発掘調査によれば、玉手山東横穴群はＡ～Ｃの３群に分かれ、北に位置するＡ群は東西方向に延びる小谷の北斜面に、Ｂ群はさらに南側の小谷の北斜面に、Ｃ群はＢ群と同じ小谷の対面する南斜面に築かれている。Ａ群では４基、Ｂ群では12基の横穴が調査されたが、既に破壊されていたものや未調査のものを加えると、Ａ群で

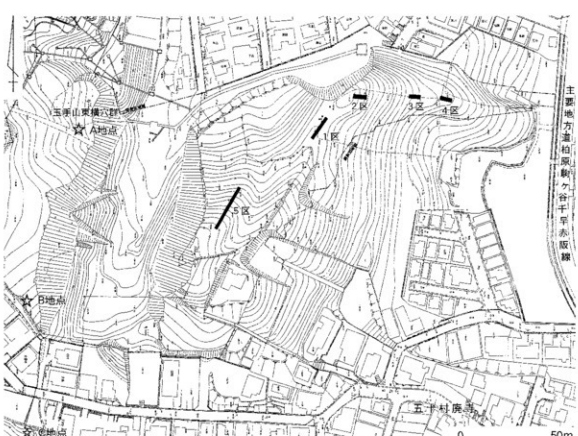


図32　調査区位置図

は９基以上、Ｂ群では25基以上、Ｃ群では１基以上の横穴が築かれていたと推定されている。ただしＣ群については横穴壁面の一部が遺存しているだけである。数多くの遺物が出土しているが、その中で銀製の鈴はよく知られている。

これらの横穴は６世紀後半～７世紀初頃にかけて築造され、一部では平安時代まで追葬や関連する葬送祭式が行われていたという。また棺には造りつけ石棺・組み合わせ石棺・木棺が見られ、床面には敷石・排水溝などの施設が敷設されるなど、大和川北岸の高井田横穴群や玉手山丘陵西斜面の安福寺横穴群とは異なる特徴も見出される。付近には同じ時期に誉田山古墳群と呼ばれる横穴式石室を埋葬施設とする高塚古墳群も営まれており、横穴の構造や墳墓の種類に反映された造営氏族あるいは葬送儀礼に関わる技術者集団の違いなどが注意される。加えてこの地域には７世紀末～８世紀初頭には五十村廃寺や原山廃寺などが創建されている（あるいは田辺廃寺を含めて考えるべきかもしれないが）。原川やその支流によって形成された「谷あい」という小宇宙・小地域において、居を構え墳墓を営んだ古代氏族相互の関わりや歴史的展開を探る上でも興味深い土地柄である。

今回の調査は調査対象地東辺および東北辺を画する尾根筋について実施した（図32）。調査区は南から北東方向に下降する尾根上に１区・５区、北東部から東に下降する尾根上に２～４区を設定し、重機および人力で掘削・精査した。その結果、いずれの調査区も地表下10～40㎝で地山が露出し、遺物・遺構は検出されなかった。また、地山は灰白色凝灰岩層（しまりがなく砂状）・明褐色砂礫層・青灰色粘土層などが薄く互層になっていた。

なお玉手山東横穴群については、Ａ群は土取り工事によって既に消滅してしまったが、Ｂ群・Ｃ群は今でも遺存しており、今回の工事でも保存されることになっている。

第6章　田辺遺跡

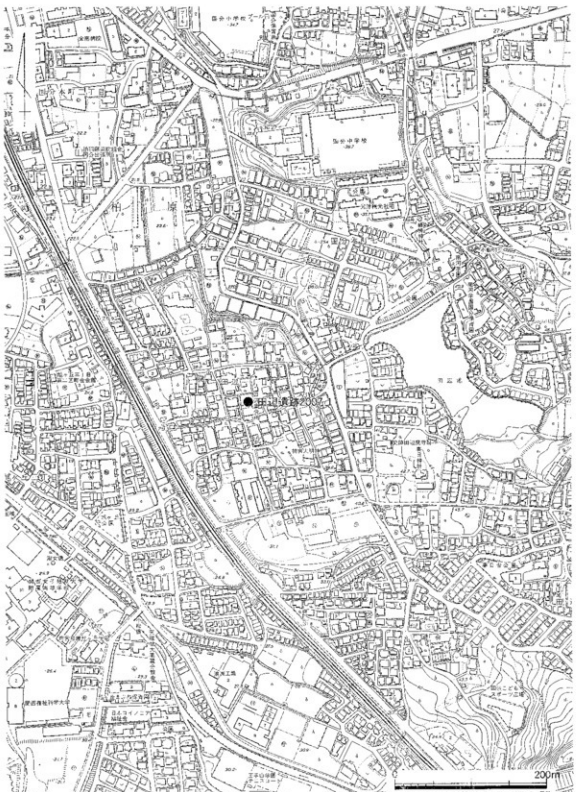


図33　調査地位置図（図1の⑥）

田辺遺跡　2007-1次調査

・調査対象地　田辺1-1023

・調査期間　2007年5月22日

・調査面積　2.00㎡

・調査担当者　桑野一幸、島内洋二

田辺遺跡は柏原市の南半部に位置し、大阪・奈良の府県境にあたる明神山地から北に張り出した南北に長い馬の背状の丘陵に立地している。調査地は近世の河内国安宿部郡国分村田辺郷の居村部にあたり、最近では住宅の建て替えが急速に進んでいるものの、なお数軒の古民家を見ることが可能である。地形的には西を原川で、東を田辺池が造られた谷筋で画された丘陵上の平坦地（標高は約40m）である。

調査では対象地の北辺部中央に１×２ｍの調査区を設定し、人力で掘削・精査した（図34）。その結果は、調査区西側で近・現代の落ち込みが見られたものの、近世以前の遺物・遺構は検出されなかった。なお、地山は黄灰色の粘土層であった。

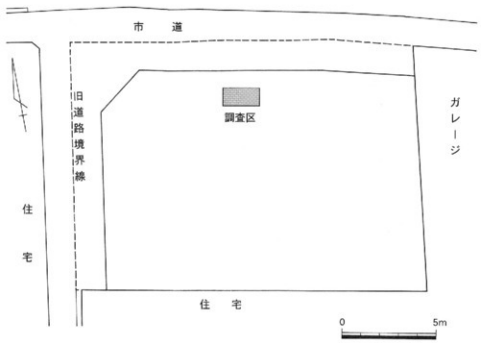


図34　調査区位置図

第７章　河内国分寺跡

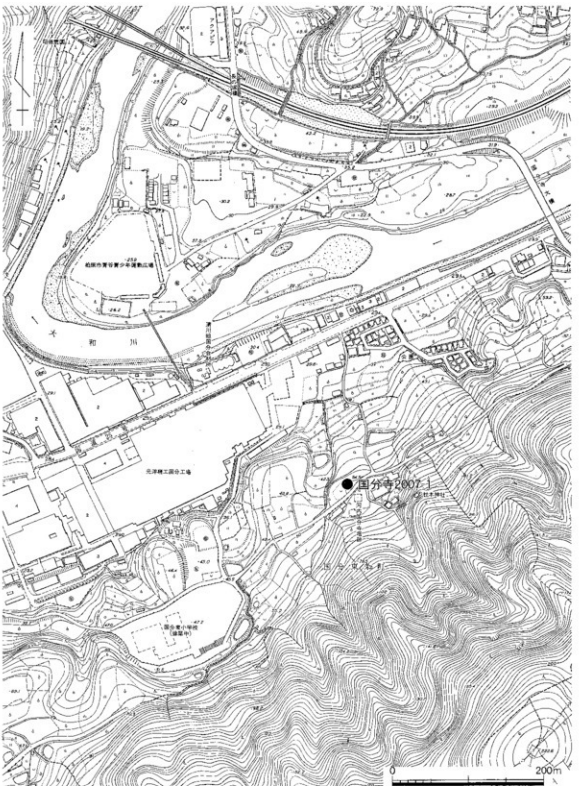


図35　調査区位置図（図１の㋐）

河内国分寺跡　2007-1次調査

・調査対象地　国分東条町3898/他19筆

・調査期間　2007年10月1日～2008年5月8日

・調査面積　39.11㎡

・調査担当者　桑野一幸

はじめに

柏原市教育委員会では昨年度から河内国分寺跡における確認調査を実施している。その成果は既に報告しているが（註１）、寺域の北を流れる大和川に向けて塔跡（註２）から北に張り出す小尾根において４つのトレンチ（１～４区）を設定し、発掘調査を実施した。残念ながら古代寺院に関連する遺構を発見することはできなかったが、溜池や水溜などの灌漑施設を検出し、近世以降における水の乏しい台地や斜面地での土地利用の実態を明らかにすることができた。この報告は、昨年度に引き続き塔跡北側の地区で実施した確認調査の概要である。

調査地の地形（図35・36）

河内国分寺跡では塔を南東隅に配置する東西２町×南北２町半の寺域が想定されている。地形としてはこの中に２つの台地（尾根筋）と１つの谷が含まれることになり、基壇が調査されている塔は東側台地の南部に立地し、未確認の金堂・講堂の位置は西側台地に推定されている。金堂を中心に見ると、塔は谷を挟んで南東方向に位置することになる。

今回の調査地は塔基壇の北西隅を削って付けられた農道に面した土地であり、塔跡のすぐ北側から西側にかけての地域である。塔跡（標高55m）とほぼ同じ高さの平坦面を含み、昨年度の調査地と比較すると一段高い場所である。北東部には不正楕円形の浅い落ち込みがあり、おそらく溜池を埋め立てた跡と考えられる。その西側には南から北西方向に深く抉られた人工水路があり、塔跡の南東方向に位置する小谷から流れ降る水流の排水路になっている。その西側（塔跡の北西側）は畑として利用されている平坦地であり、さらに緩やかな斜面と平坦面が続いている。

調査区の設定（図36）

塔の北側、北西側、西側にあたる場所に３箇所の調査区を設定した。いずれもトレンチ調査であり、調査区の番号は昨年度からの通し番号を付した。また地区割りについても昨年度の方法を踏襲している（註３）。

５区は溜池跡と思われる浅い落ち込みの南東側に設定した南北方向のトレンチである。その東壁は塔の南北方向の中軸線上（ＥＷ０ライン）に相当する。６区は塔跡西側の斜面から平坦地に設定した東西方向のトレンチであり、地山面の地形を確認するために南側に拡張した。拡張部は塔の西階段の延長線上に相当する。７区は人工水路の南端部西側に設定した南北方向のトレンチである。塔基壇の北西隅部に近接し瓦の堆積等が期待される場所である。

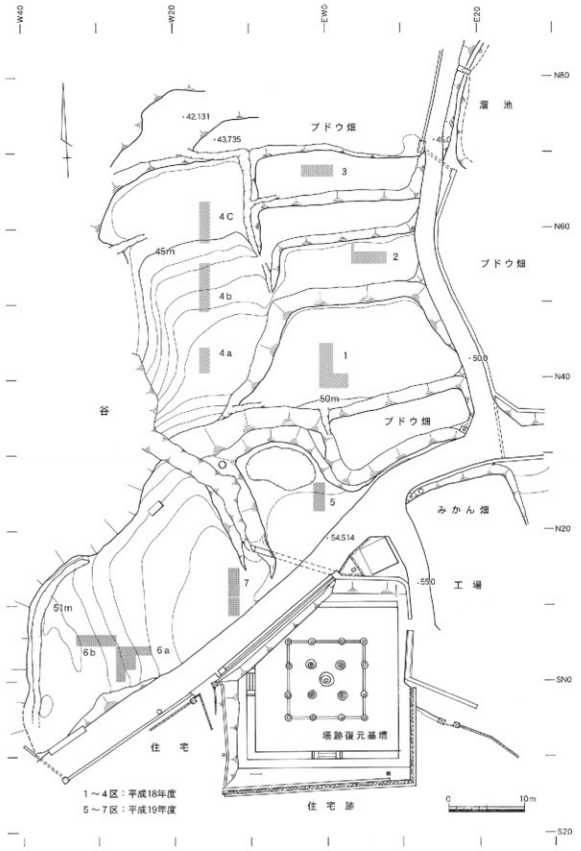


図36　調査地の現況と調査区の位置

5区の調査（図37）

5区は東西 1.5m×南北 4.0mの調査区である。南辺はN22.18（塔の中心から北へ22.18m離れていることを表す。以下同じ。）、東辺はW0.11（塔の中心から西へ0.11m離れていることを表す。以下同じ。）に相当する。

調査区における土層の堆積には、いわゆるゴミとされる生活廃棄物や建築廃材が多量に含まれており、地山面まで掘りきってはいないが最下層には近・現代の瓦や煉瓦だけが厚く堆積していた。また中央部には花崗岩塊やセメント塊が置かれ、その周辺はセメント（8層）で固められていた。なお平面図は9層上面の様子である。

こうした状況から、近代には例えば溜池のような深く大きな落ち込みが農道近くまで広がっていたものと思われる。その溜池が埋め立てられて浅く小さくなり、ある時期セメントによる護岸が施されて小さな溜池になり、その溜池もさらに埋められて浅く小さくなり、現在のような地表に痕跡だけを留めるまでに整地されたのであろう。

なお河内国分寺の瓦については1・2層から平瓦の小片がわずかに出土したのみで、ましてや関連する遺構は全く検出されなかった。

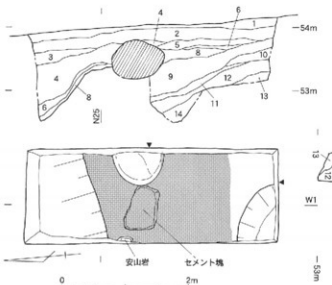
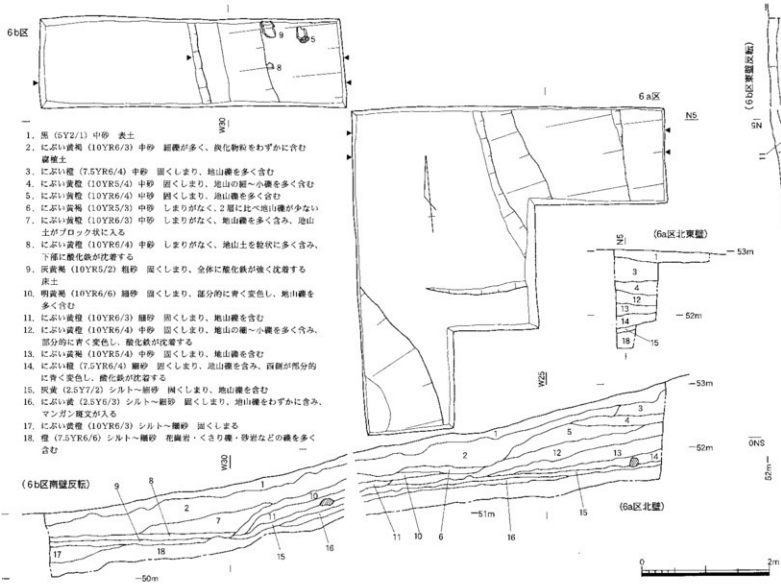


図37　5区　平面図、土層断面図（▲はサブトレンチの位置）

6区の調査（図38）

6区は東側の6ａ区と西側の6ｂ区に分かれ、前者の北壁と後者の南壁が連続して直線上になるよう設定した。当初の大きさは、6ａ区は東西 4.9m×南北 1.5m、6ｂ区は東西 4.8m×南北 1.4mであったが、6ａ区については南側に拡張し、その南北方向の最大長は 5.1mになった。なお6ａ区北壁と6ｂ区南壁を貫く直線はN5.20に相当し、6ａ区西壁はW28に相当する。

調査区における土層の堆積状況を観察すると、現在の地形（斜面）は1・2層の堆積で造られた新しい地形であることが分かる。それ以前は、おそらく地山を起源とする3～16層などの固く締ま



1. 黒（5Y2/1）中砂　表土
2. にぶい黄褐（10YR6/3）中砂　細礫が多く、炭化物粒をわずかに含む　盛埴土
3. にぶい橙（7.5YR6/4）中砂　固くしまり、地山礫を多く含む
4. にぶい黄橙（10YR5/4）中砂　固くしまり、地山の層～小礫を多く含む
5. にぶい黄橙（10YR6/4）中砂　固くしまり、地山礫を多く含む
6. にぶい黄褐（10YR5/3）中砂　しまりがなく、2層に比べ地山礫が少ない
7. にぶい黄橙（10YR6/3）中砂　しまりがなく、地山礫を多く含み、地山土がブロック状に入る
8. にぶい黄橙（10YR6/4）中砂　しまりがなく、地山土を粒状に多く含み、下部に酸化鉄が沈着する
9. 灰黄褐（10YR5/2）粗砂　固くしまり、全体に酸化鉄が強く沈着する　床土
10. 明黄褐（10YR6/6）細砂　固くしまり、部分的に青く変色し、地山礫を多く含む
11. にぶい黄橙（10YR6/3）細砂　固くしまり、地山礫を含む
12. にぶい黄橙（10YR6/4）中砂　固くしまり、地山の層～小礫を多く含み、部分的に青く変色し、酸化鉄が沈着する
13. にぶい黄褐（10YR5/4）中砂　固くしまり、地山礫を含む
14. にぶい橙（7.5YR6/4）細砂　固くしまり、地山礫を含み、西側が部分的に青く変色し、酸化鉄が沈着する
15. 灰黄（2.5Y7/2）シルト～細砂　固くしまり、地山礫を含む
16. にぶい黄（2.5Y6/3）シルト～細砂　固くしまり、地山礫をわずかに含み、マンガン斑文が入る
17. にぶい黄橙（10YR6/3）シルト～細砂　固くしまる
18. 橙（7.5YR6/6）シルト～細砂　花崗岩・くさり礫・砂岩などの礫を多く含む

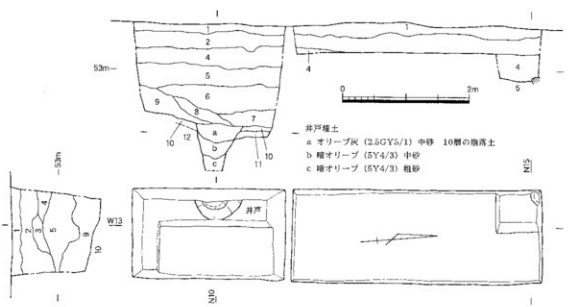
図38　6a・b区　平面図　土層断面図（▲はサブトレンチの位置）

った土砂が、現地表から１m以上深い位置にあり緩斜面だった地山上に人為的に積み上げられて、６ａ区と６ｂ区境界付近の幅の狭い平坦面と６ａ区東側の高まりが形成されていた。この平坦面および高まりが示す平面的な方向性は、残念ながら塔基壇の西辺に沿ったものではないので、そこで形成された地形も塔基壇とは無関係と思われる。さらに斜面の下方に当たる６ｂ区西側の平坦面では、８・９層で示されるように酸化鉄が強く沈着した土層が見られ、水田が営まれていたことが分かる。

遺物としては、旧地形を形作る整地層の３～16層で土師器片が出土している（表６）。いずれも小片で図化できるものは少ないが、図化可能な土師器片は図40に掲載した。杯・皿・鉢などの破片であるが、これらの土器が本来は何処に所在していたものなのか、例えば塔および塔周辺で使用され廃棄された土器であるのか、現状でははっきりしない。また10層からは軒丸瓦と丸瓦の比較的大きな破片が出土しており図41に掲載した。図38は６区の２層を除去した状態の平面図であるが、６ｂ区東側でこれらの瓦の出土状況を明示している。

７区の調査（図39）

７区は東西 1.5m×南北 6.5mの調査区である。塔との位置関係は、調査区西辺はW 13.60、南



1. 黒（10YR2/1）細砂　表土
2. 黒褐（10YR3/2）細砂　中礫を含む
3. にぶい黄褐（10YR5/4）中砂　くさり礫の細～中礫を含む
4. 黄褐（10YR5/6）細砂　固くしまり、くさり礫や花崗岩の小～粗礫を多く含む
5. 黄褐（10YR5/6）細砂　固くしまり、礫の量が４層に比べてやや少なく、上部にオリーブ灰（10Y5/2）中砂がブロック状に入り、酸化鉄が沈着する
6. 暗褐（10YR3/4）中砂　しまりが悪く、くさり礫の角礫や板状礫を含む
7. 暗オリーブ褐（2.5Y3/3）中砂　しまりが悪く、くさり礫や花崗岩礫を含む
8. 褐（10YR4/4）中砂　くさり礫や花崗岩礫を含む
9. オリーブ褐（2.5Y4/6）中砂　固くしまり、くさり礫が多く、オリーブ灰（10Y5/2）中砂がブロック状に入る
10. オリーブ灰（2.5GY5/1）シルト～細砂　粘性がやや強く、細礫を含み、酸化鉄が沈着し、マンガン斑文が顕著
11. オリーブ褐（2.5Y4/3）中砂　わずかに細礫を含む
12. にぶい黄橙～明黄褐（10YR6/3～10YR6/8）粘砂～細礫　花崗岩バイラン土　地山

図39　７区　平面図、土層断面図

辺はN8.70に相当する。

調査区においては、1・2層の黒色系の土層を除去すると地山を起源とする黄褐色系の固く締まった土層が現れた。当初、この土層を地山と見誤ったが、調査区南側でさらに下層を確認すると、これらが厚い整地層であることが判明した。さらに整地層の下層からは、田畑の耕作に由来する酸化鉄の沈着やマンガン斑が顕著な土層（10層）や小さな井戸が検出され、花崗岩パイラン土の地山がこうした土層や遺構のベースになっていることが判明した。

井戸は直径70cm程、深さは80cm以上で、断面の形状は漏斗状を呈している。小さな井戸であるが水の湧出量は多く、一度汲み出して空にしても瞬く間に水で満たされる状態であった。

遺物は整地層から土師器片・平瓦片・砥石などが出土した。いずれも小片であるが、その一部は図40・41に掲載した。

7区を設定した場所は塔跡北側の現在畑として利用されている平坦面である。塔跡の標高は55m程と考えられるが、此処の地表面は標高およそ53.7mを示し、現状でも塔跡に比べてやや低くなっている。7区の調査結果からは、以上のようにこの地表面よりもさらに1.6m程下層に耕作土・井戸・地山などが存在することが明らかになったが、こうした状況から7区の南側は塔跡あるいは塔北西部に付けられた道路面から降る低い崖状になっており、その崖下で耕作が行われていたと考えられよう。その時期ははっきりしないが、7区の整地層はその特徴や標高などから6区の整地層と一連の土層と判断され、近・現代のある時期まではこうした地形であったと考えられる。

遺物（図40・41、表6）

全体では160点余りの遺物が出土している。土師器が目立つが、いずれも小片であり図化できる資料は僅かであった。

1は7区9層から出土した土師器の杯。復元した口径は18.0cm。外面口縁部にはヨコナデ、体部には粗いヘラケズリ調整が施され、内面には放射状の暗文が見られる。2は6ｂ区11層から出土した土師器の鉢。小片のため口径は復元できなかった。口唇部を上方に引き上げ僅かに肥厚する。3は6ａ区15層から出土した土師器の皿。復元口径は21cm、高さ2.9cm。外面口縁部はヨコナデ、体部～底部はヘラケズリ調整が施されている。器面の磨耗が顕著で内面は十分観察できないが、側面には放射状暗文、底面には螺旋状暗文が見られる。

4は7区5層から出土した砥石。直方体であるが、一端を欠損する。全体に黒色の煤を帯びているように見える。

5は6ｂ区10層出土の軒丸瓦。複弁六葉蓮華文と思われ、外区は隆起線鋸歯文、周縁は素文縁である。丸瓦部の凹面には布目が見られ、凸面にはヘラケズリおよびナデ調整が施されている。瓦当と丸瓦の接合位置は弁端の裏側であり、上下に厚く粘土を補填している。色調は灰白色、焼成は堅緻、胎土は粗く細礫が多い。大阪府教育委員会調査の軒丸瓦第1類に相当する（註4）。6は6ｂ区2層出土の平瓦。一枚作りで凸面には粗い縄目タタキが施されている。7は7区4層出土の平瓦。一枚作りで凸面には粗い縄目タタキが施されているがその一部はナデ消されている。8は6ｂ区10

地区	層位	遺構	層位	軒丸瓦	平瓦	丸瓦	土師器	須恵器	
5区	1層				9	3			陶磁器1
	2層				20	7	1		
	9層				1				近代瓦1、煉瓦7
合　計					30	10	1		
6区	1層				1				陶磁器1、近代瓦1
	2層				2	1	2	1	陶磁器3、近代瓦2、瓦製品1
	3層				1		1	1	陶磁器1
	7層				1	1	1		
	9層						10	1	
	10層			1		2	4		
	11層						9		
	12層						8	1	
	13層						1		
	15層						6		
	16層						12		陶磁器1
合　計				1	5	4	54	4	
7区	1層				9	3	1		
	2層					1	1		陶磁器1
	5層				2		11		土師質土器1
	6層						5		砥石1
	9層						18		
		井戸	a層				2		
		井戸	b層				1		
合　計					11	4	39		

表6　調査区別出土遺物数量表

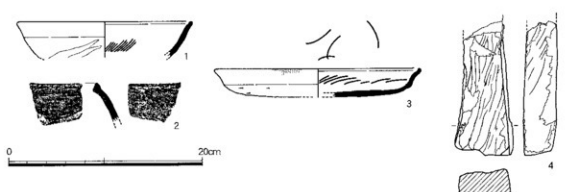


図40　出土遺物（1）

層出土の丸瓦。凸面は縄目タタキの後にナデ調整が施されている。9は6ｂ区10層出土の玉縁付き丸瓦。凸面には縄目タタキ後にナデ調整が施され、凹面には糸切痕および布目痕が見られる。色調は灰色を呈し、焼成は堅緻、胎土には細礫が多い。なお玉縁部の凸面もナデ調整が施されているが、一部に布目痕が遺されている。

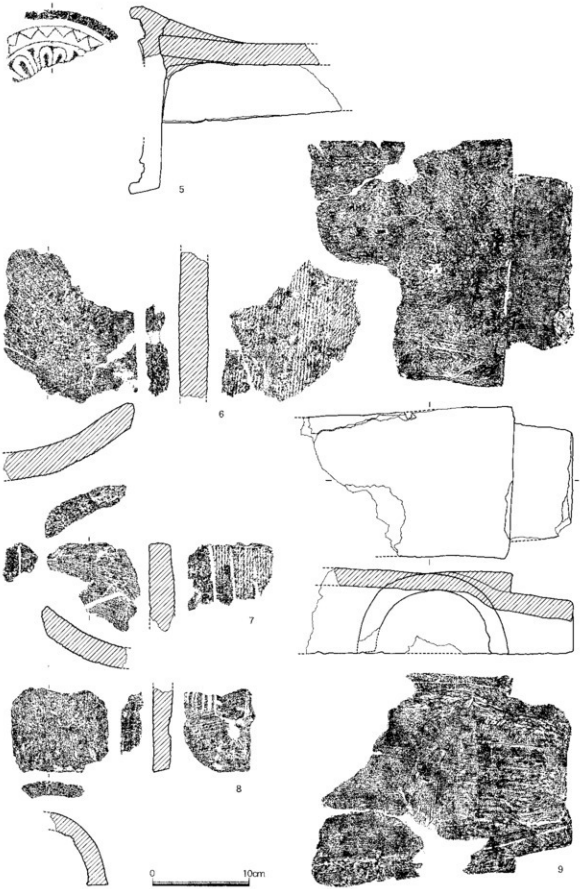


図41　出土遺物（2）

まとめ

今年度の調査でも、昨年度と同じように河内国分寺あるいはその塔に関連する遺構は検出されなかった。各調査区の調査結果からも分かるように、塔跡の北側から北西側にかけての地区では、近世～近代の時期に耕作地を確保するために地形の改変が行われ、さらに現代にかけて、その旧地形を埋めるように整地が行われて現地形が造られることになった。

したがって、塔跡周辺の現在の地形から造塔当時の地形や環境を推測することは困難であるが、例えば今回の調査中でも「曽祖父の時代までは北西の谷筋（この方向には推定金堂院がある）から調査地に上るための石の階段が柿ノ木の根元にあった」という話も伺っており、こうした地元に遺る伝聞資料に注意を払うことも必要であろう。発掘調査だけではなく、こうした点でも地元の方々の協力を頂きながら、これからも河内国分寺の実態を解き明かすことができるよう努めていきたいと思う。

註

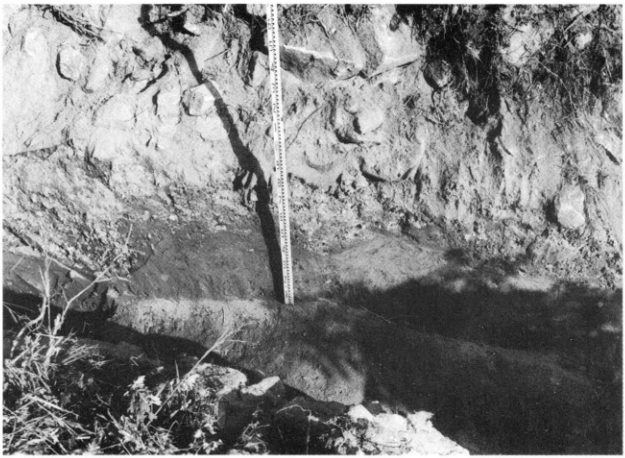
1　柏原市教育委員会『柏原市内遺跡群発掘調査概報　平成18（2006）年度』　2008

2　現在の塔跡は発掘調査で検出された基壇面を覆うようにコンクリート製の基壇が復元されている。

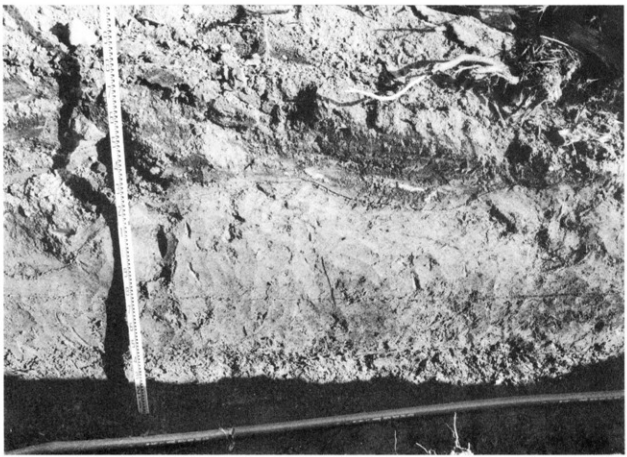
3　註1に同じ。

4　大阪府教育委員会『柏原市国分東条町河内国分寺跡発掘調査概要』　1970

写真図版

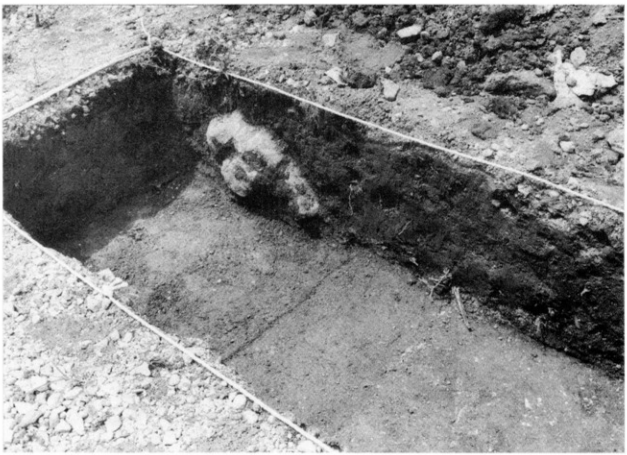


１　６区東壁土層断面



２　７区東壁土層断面

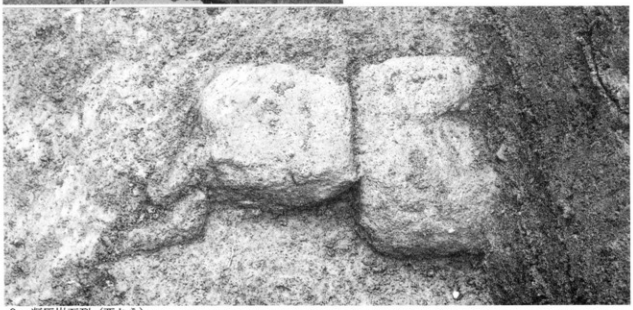
１　１区設定状況（東から）



２　１区掘削状況と北壁の花崗岩塊（南東から）

2　凝灰岩石列（北西から）

1　凝灰岩石列と瓦溜り（西から）



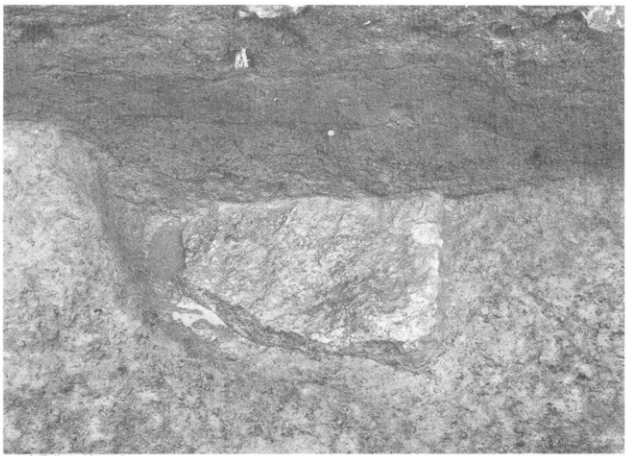
3　凝灰岩石列（西から）

1　瓦溜り上面の状況（上が北）

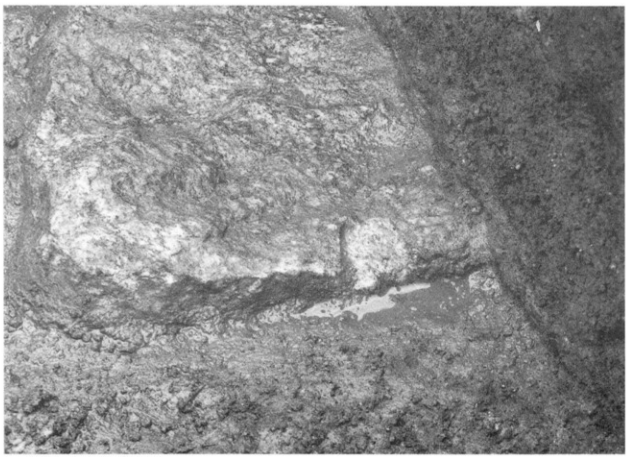
2　東塔西辺雨落溝の側石（下が溝内、右が北）

1　2区設定状況（南東から）

2　東塔礎石検出状況（南東から）



1　東塔礎石（東から）



2　東塔礎石の矢跡（北から）

1　巴文軒丸瓦（32）

2　巴文軒丸瓦（31）

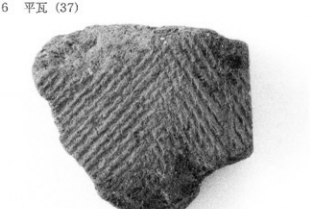
3　巴文軒丸瓦（33）

4　巴文軒丸瓦（10）

5　平瓦（36）

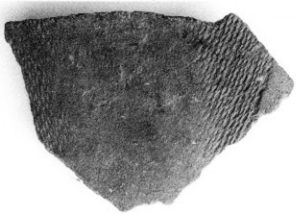
6　平瓦（37）

7　平瓦（35）



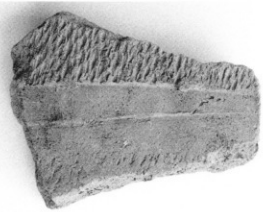
8　平瓦（1）

1　平瓦（22）



2　平瓦（16）

3　平瓦（3）



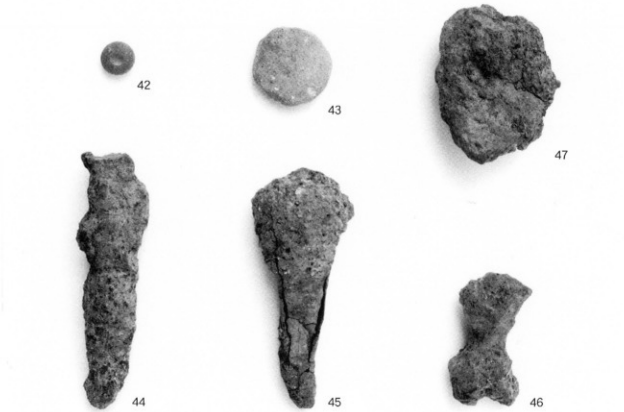
4　平瓦（15）

5　平瓦（7）

6　平瓦（24）

7　平瓦（19）

8　平瓦（6）



1　ガラス小玉、土製円盤、鉄片、鉄釘

2　壁土

1　調査地全景（北から）

2　調査地南半の調査状況（北東から）

1　7区調査風景（南から）

2　7区調査終了状況（南から）

1　7区南壁土層断面

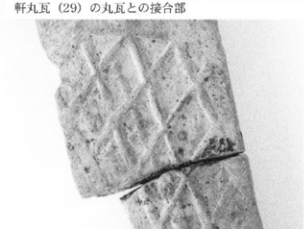
2　7区5層上面の瓦溜り（東から）

1　素弁八葉蓮華文軒丸瓦（29）

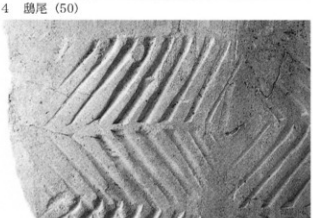
2　同左（30）

3　軒丸瓦（29）の丸瓦との接合部

4　鴟尾（50）

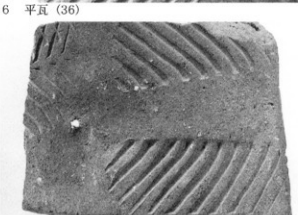


5　平瓦（34）



6　平瓦（36）

5　平瓦（37）



6　平瓦（35）

1　平瓦（38）

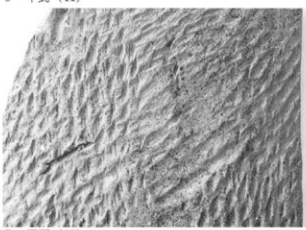
2　平瓦（43）

3　平瓦（42）

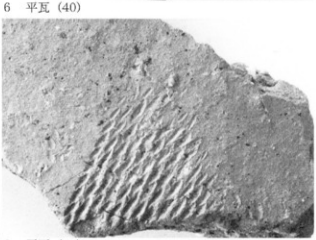
4　平瓦（39）

5　平瓦（41）

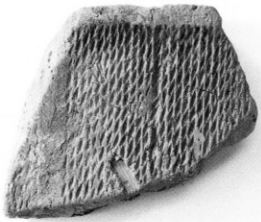
6　平瓦（40）



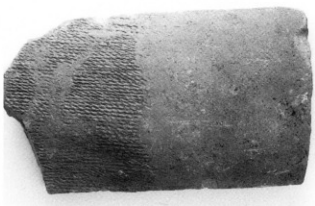
7　平瓦（45）



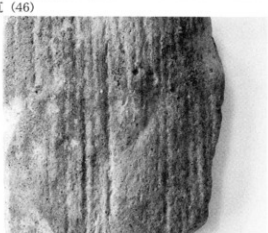
8　平瓦（47）



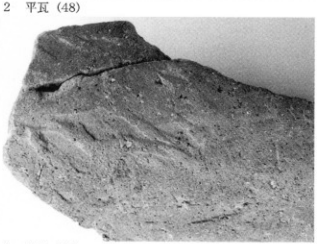
1　平瓦（46）



2　平瓦（48）



3　平瓦（49）



4　丸瓦（56）

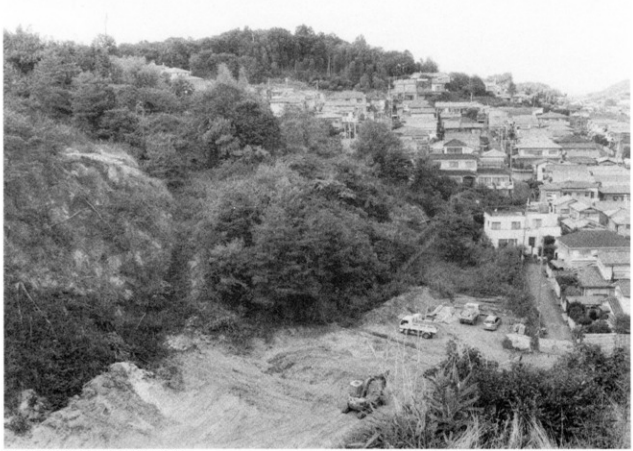
5　平瓦（52）

6　丸瓦（55）

1　3区北壁土層断面

2　4区調査終了状況（南から）

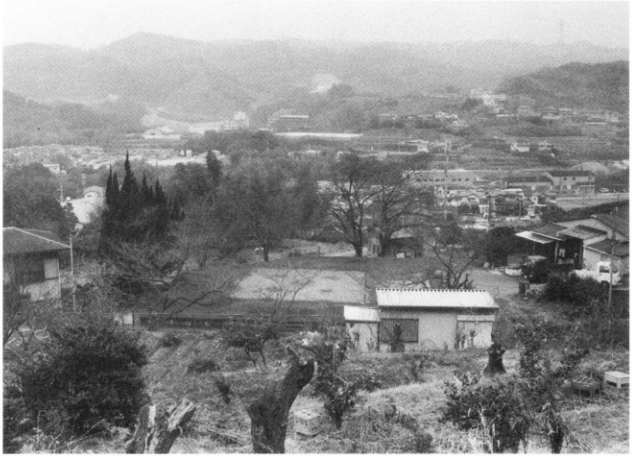
1　５区掘削状況（南から）



2　５区から玉手山７号墳を望む

1　調査区設定状況（東から）

2　調査区西側の落ち込み（北西から）



1　復元塔基壇（南から）

2　5区遠景（南東から）

1　5区調査終了状況（北西から）

2　5区溜池埋土堆積状況（東から）

1　6区遠景（南東から）

2　6b区（手前）・6a区（奥）調査状況（西から）

1　6b区東端の瓦出土状況（南から）

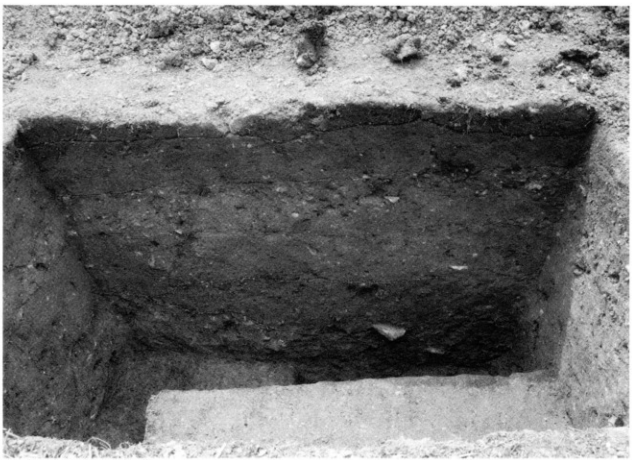
2　6b区東端の軒丸瓦出土状況（南から）

1　6b区（手前）・６a区（奥）調査終了状況（西から）

2　６a区北壁土層断面（南西から）

1　7区遠景（南東から）

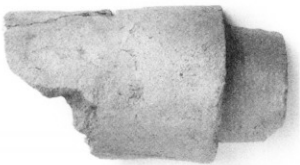
2　7区南壁土層断面（南西から）



1　7区南半西壁土層断面

2　7区井戸（北東から）

1　復弁六葉蓮華文軒丸瓦（5）



2　丸瓦（9）

3　平瓦（7）

4　平瓦（6）

5　砥石（4）

6　土師器（3）

報告書抄録

ふりがな	かしわらしないいせきぐんはっくつちょうさがいほう
書　名	柏原市内遺跡群発掘調査概報　平成19（2007）年度
副書名	
巻　次	
シリーズ名	柏原市文化財概報
シリーズ番号	2008-I
編著者名	桑野一幸
編集機関	柏原市教育委員会
所在地	〒582-8555　大阪府柏原市安堂町1-43　電話072-972-1501
発行年月日	平成20（2008）12月1日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	緯度（北緯） 経度（東経）	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
船橋	ふるまち 古町池先	27221	FH 2007-1	34° 34′ 52″ 135° 37′ 18″	H19.10.24 H19.11.13	42.90	公道設置
太平寺廃寺	たいへいじはいじ 太平寺2丁目	27221	TGT 2007-1	34° 34′ 58″ 135° 37′ 56″	H19.6.25 H19.7.10	7.00	範囲確認
安堂	あんどう 安堂町899他	27221	AD 2007-1	34° 34′ 51″ 135° 37′ 57″	H20.1.17 H20.2.19	164.00	宅地造成
安堂廃寺	あんどうはいじ 安堂町674	27221	ADT 2007-1	34° 34′ 47″ 135° 37′ 52″	H19.12.6 H19.12.6	1.00	共同倉庫
高井田	たかいだ 高井田地内	27221	TD 2007-1	34° 34′ 32″ 135° 37′ 58″	H19.11.15 H19.11.16	2.58	歩道設置
玉手山東横穴群	たまてやまひがしよこあなぐん 旭ヶ丘2丁目	27221	TYHK 2007-1	34° 33′ 32″ 135° 37′ 56″	H19.7.23 H19.9.18	84.50	宅地造成
田辺	たなべ 田辺1丁目	27221	TB 2007-1	34° 33′ 40″ 135° 38′ 23″	H19.5.22 H19.5.22	2.00	個人住宅
河内国分寺跡	かわちこくぶんじあと 国分東条町	27221	KBT 2007-1	34° 34′ 02″ 135° 39′ 26″	H19.10.1 H20.5.8	39.11	範囲確認

所在遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
船橋	集落	奈良	なし	土師器	
太平寺廃寺	社寺	奈良、平安、中世	東塔基壇	軒丸瓦、丸瓦、平瓦	
安堂	集落	古墳、奈良	なし	土師・須恵器、軒丸瓦、鴟尾	
安堂廃寺	社寺	なし	なし	なし	
高井田	集落	奈良	なし	土師器、須恵器	
玉手山東横穴群	横穴	なし	なし	なし	
田辺	集落	なし	なし	なし	
河内国分寺跡	社寺	奈良、近世、近代	井戸	土師器、軒丸瓦、丸瓦、平瓦	

柏原市内遺跡群発掘調査概報

平成19（2007）年度

発　行：柏原市教育委員会
大阪府柏原市安堂町１－43
発行日：平成20年（2008）12月１日
印　刷：斉　博　社